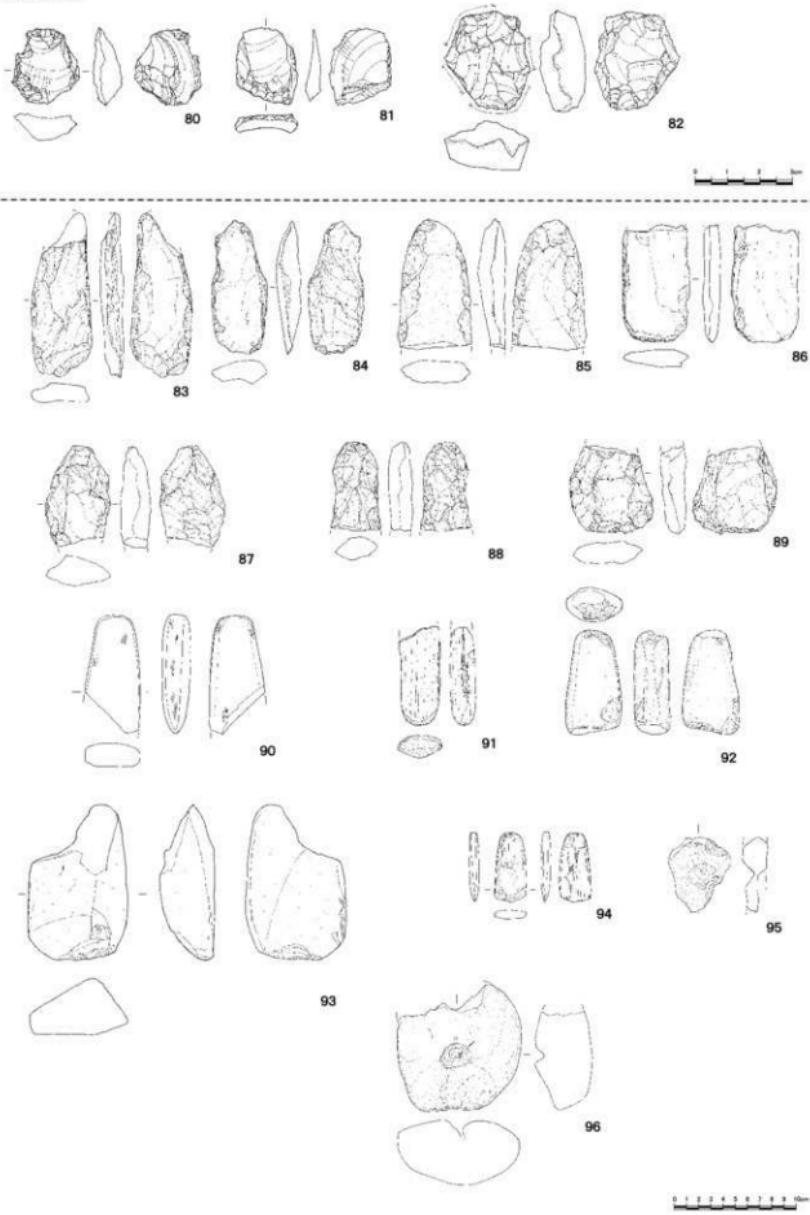




第192図 東台遺跡98号住居跡出土土器③ (1 / 4)

98号住居石器



第193図 東台遺跡98号住居跡出土石器（1／4、2／3）

13は地文条線のみの胴部片。

14は胴上部の張る深鉢で地文縄文の上に隆帯で直下懸垂文と細い蛇行文を6単位配す。15と16は地文撚糸文で、16は胴部につなぎ文を沈線でつなぐ。17~19は区画文と渦巻文を口縁文様帯とし、18は磨消懸垂文をもち、19は地文条線。20と21は地文撚糸文で連弧文をもつ。22~25は地文条線で連弧文・沈線の垂下文をもち、25はミニチュアである。26は地文撚糸文沈線による蛇行文を加える。27は突出上面の渦巻文周辺を刺突する。30~33は深鉢底部で、33はミニチュア精製土器である。17~33は加曾利E II式。

34は押引文列をもつ浅鉢で勝坂I式。35と36は押引波状文をもち胎土に金雲母をもつ阿玉台II式。37~46は幅広押引文と三角押文を基調とする類。47~52と54は筒形深鉢で爪形文と三叉文が著しい。55~57は深鉢の把手で隆帯に刻目文をいれる。58~72は口縁が膨らみ胴部が筒形となる深鉢で、隆帯で稍円形区画を連続させる特徴があり、区画内は沈線列で隆帯上には爪形刻目が入り、この上下は斜縄文の地文のみである。73は沈線列の著しい浅鉢。74は前に突出する把手。75は無文口縁の浅鉢で文様帶は沈線列を稍円形区画で囲む。76は無文の把手状口縁部。77はミニチュアの深鉢。78は地文縄文の、79は無文胴部片を側面調整した土製円板である。47~76は勝坂III式（第V様式）である。

（3）集石土坑

98号住居跡の覆土内に1基検出した。住居跡の床面を壊して構築している。

【出土土器】（第195図上1~7）

1は隆帯に爪形文を入れる勝坂III式。2は大深鉢の口縁部文様帶で2本組み隆帯による区画文をつくる。3は縄文を4は撚糸文を地文とし沈線で懸垂文をつくる。5は沈線の垂下文をもつ底部。6は沈線で肋骨状文をつくる曾利IV式。

（4）土坑

土坑2基を検出した。土坑1は83号住居跡の東側に隣接する。土坑2は83号住居跡内で検出した。

第87表 東台遺跡第46地点土坑一覧表

(単位cm)

	平面形態	確認面	底面	深さ	備考
土坑1	円形	116×114	74×70	92	土器多量出土
土坑2	稍円形	104×74	86×54	17	83号住居内

【土坑1出土土器】（第195図下1~39）

1は波頭に近い口縁で区画内側に2列の押引文を入れ押引きによる波文をもつ。2は三角隆帯によるクラシック状懸垂文をもち、底面には植物の圧痕がある。1と2の胎土には金雲母を多く含む。共に阿玉台II式。

3は区画内に連続爪形文と半月状刺突を入れる蓮華文をもつ。4~6は口縁に大把手をもち隆帯上に連続爪形文、不定形区画内に三叉文と沈線列をもつ。7~9は隆帯上に爪形文をもち、文様帶は継長化した区画内を沈線列と三叉文で埋める類で頸部文様帶をもつ。10はこの類の無文口縁部。11~17は4~9より小さい深鉢の胴部文様帶と素文帶部分である。15は14と同類で円形刺突文が加わる。16~17は同一個体である可能性が高い。18は7と同巧の文様をもつ。3は勝坂IV様式、4~18は勝坂V様式であろう。19は大深鉢で口唇にはC字状爪形文、幅広押引文、三角押文がセットになる厚さ2cmの大形口縁部片。20は山形把手頂が扇形に突出し沈線による波形を描き胎土に金雲母をもつ阿玉台II式新相のもの。21と22は幅広押引文をもつ類で勝坂IV様式。23~26はラフな沈線列の土器で勝坂式末期。

27は無文口縁で胎土に白色細砂粒を含む。28は胎土に金雲母をもつ素口縁。29は素文帶下にLR縄文が全面に施文される。30はRL縄文を全面に施文する胴下部。31は深鉢底部で、32は浅鉢底部。

33は波状口縁下に前に突出した凸帯と区画隆帯をもつ。34は口縁文様帶片横位施文の撚糸と貼付隆帯が特徴。35は区画文を沈線列で埋める。36と37は櫛状条線を地文とし、波頭に丸味のある連弧文土器。38と39は櫛状条線を地文とし、半裁管状工具で連弧文と蛇行懸垂文を描く。33~34は加曾利E I式。36~39は加曾利E II式。1号土坑土器は90~95%が勝坂IV・勝坂V様式で83号住居の遺物組成に近い。

第88表 東台遺跡第46地点集石一覧表

(単位:cm・g)

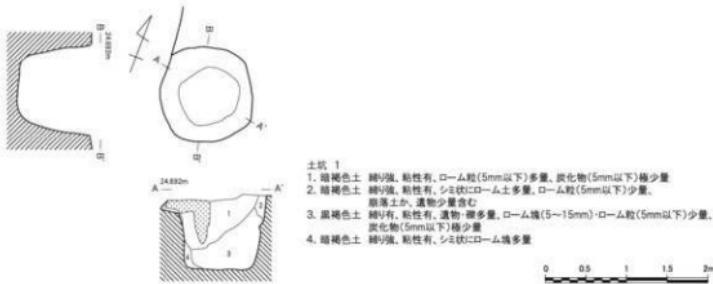
No.	平面形態	土堆確認面	底面	深さ	縦範囲	個数	重量	赤化			完形確 (%)			備考		
								個数	重量	個数比	重量比	個数	重量	個数比		
	楕円形		76×58	30×21	18	50×38	117	9550	8	1880	6.8%	19.7%	12	2320	10.3%	24.3%

第89表 東台遺跡第46地点出土石器一覧

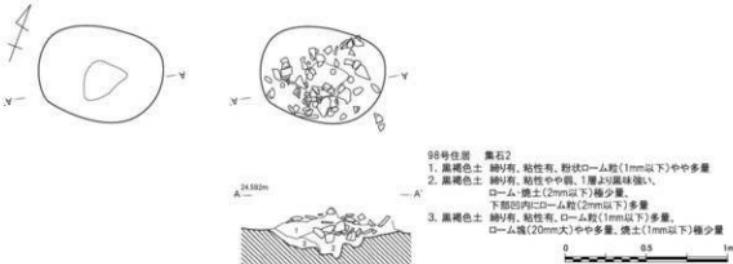
(単位:cm・g)

遺物	No.	種別・器種	口径・長	底径・幅	高さ	厚さ	重量	技法／文様／その他	鑑定生産地	推定年代	残存・備考
83号住居	26	ナイフ	2.2	1.4	0.7		1.9		黒曜石	縄文時代	No.8
83号住居	27	打製石斧	6.8	4.7	2.6		91.6		頁岩	縄文時代	No.1
83号住居	28	打製石斧	8.7	5.6	1.9		122.9		砂岩	縄文時代	No.15
98号住居	80	楔形石器	2.3	2.0	0.9		2.8		黒曜石	縄文時代	No.231
98号住居	81	調整調片	2.3	2.0	0.6		2.0		黒曜石	縄文時代	No.1
98号住居	82	火打石	3.0	2.8	1.5		12.8		チャート	縄文時代	
98号住居	83	打製石斧	13.8	4.8	1.9		154.1		緑泥石片岩	縄文時代	
98号住居	84	打製石斧	10.6	4.9	2.2		113.9		砂岩	縄文時代	No.32
98号住居	85	打製石斧	10.1	5.9	2.3		160.7		砂岩	縄文時代	
98号住居	86	打製石斧	9.5	5.5	1.4		115.3		緑泥石片岩	縄文時代	No.26
98号住居	87	打製石斧	8.2	5.3	2.5		117.3		ホルンフェルス	縄文時代	
98号住居	88	打製石斧	7.6	4.3	2.1		81.4		ホルンフェルス	縄文時代	
98号住居	89	打製石斧	7.4	7.2	2.3		130.0		珪質繊粒砂岩	縄文時代	
98号住居	90	磨製石斧	9.2	4.2	2.1		144.2		蛇紋岩	縄文時代	No.246
98号住居	91	たなき石	9.6	3.2	2.0		80.1		片岩	縄文時代	No.57
98号住居	92	たなき石	8.8	4.5	2.9		185.8		砂岩	縄文時代	No.82
98号住居	93	打製石斧	11.8	7.4	4.0		365.8		砂岩	縄文時代	No.64
98号住居	94	磨製石斧	5.6	2.6	0.8		21.9		粘板岩	縄文時代	
98号住居	95	くぼみ石	6.2	5.2	2.1		53.1		緑泥石片岩	縄文時代	No.97
98号住居	96	くぼみ石	11.2	10.8	5.0		803.3		砂岩	縄文時代	No.243
集石2	7	磨石?	12.0	8.7	4.1		700.1		閃綠岩	縄文時代	No.1

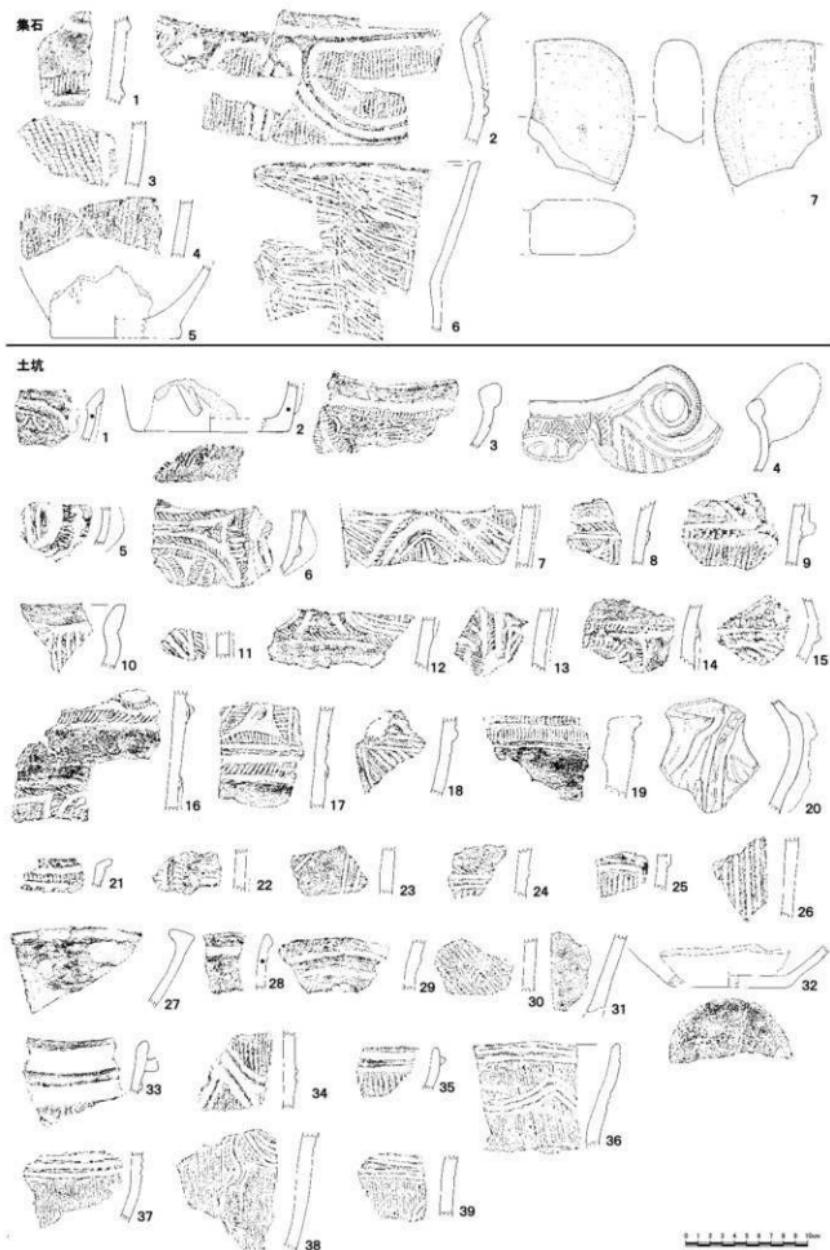
土坑1



集石2



第194図 東台遺跡第46地点土坑 (1/60) 集石1~4 (1/30)



第195図 東台遺跡第46地点土坑・集石出土土器・石器 (1/4)

第III部　まとめ

第1章　2006年度の調査について

2006（平成18）年度は、52件の試掘調査を行い、うち8件が個人住宅建設に伴う本調査、1件が公共工事に伴う本調査、9件が民間開発に伴う本調査に移行した。その他、10件の工事立会を行った。工事立会を除いた開発面積60,976m²のうち21,727m²を調査したことになる。前年度と比較すると面積は3倍近くに増加している。新設小学校建設に伴う調査が増加分の大きな比重を占めているが、翌年度に調査が継続している面積（西遺跡1地点の3,000m²）も含まれているので、実質の調査面積はやや少ないのであるが、それでも近年中では発掘の多い年であった。

開発の内容は、相続に伴い建売住宅や宅地開発する例が多かった。基礎工事が遺構面に影響を及ぼさないため宅地部分は保存し、道路部分や削平部分を発掘する等、部分的な発掘であった。

【旧石器時代の調査】今年度は4ヶ所で旧石器時代の遺構を検出した。鶴ヶ舞遺跡は福岡江川左岸の斜面に位置し、7地点と今回の10地点の2ヶ所で礫群を検出している。川から100m離れ、現谷底とは3～4mの比高差がある。

江川南遺跡は福岡江川を挟んで鶴ヶ舞遺跡の対岸の右岸斜面地に位置する。22地点は川から50m、23地点は20mの近距離にあり、現谷底とは1～2mの比高差がある。今までに2・11・19地点と合わせ5ヶ所で旧石器時代の礫群・石器群を検出しており、東西150m、南北120mの広範囲に分布する。いずれの個所でも礫群は径1～2.5mの比較的小規模なものであり、5～10mの範囲に2,3基の礫群がまとまって分布する。

一方、石器群は径5m以上の広い範囲に分布する場合が多いが、22・23地点では石器点数が少なく、礫群に付随するような小規模なものであった。

東台遺跡第45地点では長11.4cm、幅6.9cm、厚5.5cm重さ560gもある黒曜石の石核が出土した。石器群は立川ローム第V層から第VI層にかけて3ヶ所検出したが、石核はその石器群の南西端で検出した。5cm前後の縦長剥片を剥離していくたる残核で、石器群からは同

じような石質の縦長剥片やナイフ形石器を検出したが、今のところ接合には至っていない。

今後、石器・礫とともに遺構間の接合を試み、遺構の新旧関係や集団の移動を復元できるようなデータを蓄積していきたい。

【縄文時代】早期・前期と思われる遺構には淨禪寺跡遺跡第26地点の炉穴がある。10基検出し、うち4基から早期の土器片を検出した。2～7m間隔で点在し、足場を共有するような遺構同士の重なりはない。

この他に西ノ原遺跡第135地点で1基、神明後遺跡第28地点で3基の炉穴を検出しているが、時期の確定できる遺物はない。神明後遺跡の場合、3基の炉穴が放射状に配置され、外側に焼土面を持つという特徴があるが、中心部は風倒木痕により擾乱される。

中期では6ヶ所の調査地点で住居跡を検出した。

亀居遺跡第61地点では中期前半、阿玉台Ⅱ式期古相の住居跡を検出した。阿玉台Ⅰb式期からⅡ式期と推測する本遺跡の集落時期の範疇に入る。

江川南遺跡第23地点では中期前半、新道式期の住居跡を新たに1軒検出した。同地点は第1地点として調査済みで（1977年）、勝坂Ⅰ式期の住居跡を1軒検出している。亀居遺跡、江川南遺跡は福岡江川の上流と下流に位置し、炉体土器を伴う住居構造や、住居に重複がないことが指摘されている。（今井・坪田本書）

西ノ原遺跡第135地点では中期後半、加曾利EⅠ新式の住居跡を検出した。西ノ原遺跡の縄文集落は阿玉台Ⅰb式期から加曾利EⅢ式期まで継続し、上流から下流へ向かって集落の中心が移動している事が看取できる。（桜井2005）加曾利EⅠ新期の集落は、南側へ偏重する傾向を見せており、183号住居跡は当該期集落の南西端に位置する。加曾利EⅡ式期の集落はさらに西へ拡張していく。等高線を詳しく見ると、西ノ原遺跡の南側に東流する浅い谷が存在することがわかる。（第119図参照）縄文時代中期に流水があったかどうかは不明であるが、住居の配置はこの浅い谷に沿ったラインが看取できる。

神明後遺跡第28地点では中期後半、加曾利E I新期からE III期の住居跡11軒を検出した。E I新式期の住居跡は4軒で、18号・22号住居跡は斜面地に作られているため、台地側の壁が高くなり1mを超える深さがある。両住居とも多量の土器が廃棄されていた。床直上の土器もあるが、レンズ堆積した土の上に土器を廃棄して行った、いわゆる吹上パターンを示す。特に22号住居跡は完形に近い状態の土器が多く、出土土器は阿玉台II式から加曾利E I新式期まで、E I古式からE I新式古相の土器が特に多い。18号住居跡の場合は殆んどがE I新式である。17号住居跡も覆土出土の土器が多く、E I新式からE II式である。また、内面に文様が塗彩された浅鉢が出土した。

加曾利E II式期は5軒。20号住居跡では、特殊な出土状況がある。石開い炉を中心とした三角形の頂点に小さな炉とピットがあり、ピットの上に深鉢が1個正位の状態で浅く埋っていた。底辺に位置する2基のピットの脇には伏せた状態で深鉢が2個、その中间に石が2列平行に並んだ状態で出土した。中心にある石開い炉の中にも石が置かれており、かなり意図的な配置を伺わせる。なお、土器は全て胴下半を欠く。

また、20号住居の配石、炉、埋窓の軸線を延長すると屋外埋窓1と2の中間を通る。方位はN-42°-Wで、加曾利E I式期の17号、18号、22号住居跡の主軸方位と近似するが、E II式期の16号、19号、25号住居跡の主軸とはやや異なる。

東台遺跡では第46地点で2軒、48地点で3軒の住居跡を検出した。98号住居跡は加曾利E II式期の住居で覆土内に集石土坑があった。

【古代】奈良・平安時代の住居跡を7軒確認し、うち3軒を調査した。松山遺跡第40地点H33号住居跡は8世紀後半、奈良時代の住居跡で、北壁中央に竈が設けられている。

神明後遺跡第28地点のH 2号住居跡は9世紀前半、平安時代初頭の住居跡で北壁中央に竈が設けられている。竈左側の壁際から須恵器坏を小ぶりにしたような土器坏が8枚まとめて出土した。内面と口縁部を横撫でし、体部下半から底部にかけて削りする。器形は同時期の器としては特異だが、整形や含有物は8世紀代の土器坏と類似する。8枚全てに煤が付着

していることから灯火具として使用したと思われ、灯火具専用に作られた土器の可能性がある。また、須恵器坏も6点に煤の付着が認められたが、割れ口にも煤が付着する底部破片の坏(第179図No 9)は、「芯押え」として再利用した可能性がある。(註1)

一方、頸部を打ち欠いた須恵器壺の内面の2/3以上に煤が多量に付着していた。灯火具の多さを考慮すると、この壺の使用方法にも注意が必要である。

また「十両」と底部に墨書きされた須恵器坏も検出している。

川崎遺跡第21地点のH51号住居跡は9世紀後半・平安時代の住居跡で、東壁に竈が設けられている。竈の北側(左側)は張出しており、竈南側(右側)は棚状施設と思われる。

【中世】駒林遺跡第1・2地点、神明後遺跡第28地点で時期不明の溝・堀跡を検出した。覆土のサンプルからテフラ分析を行った結果、駒林遺跡第1地点と神明後遺跡第28地点の堀跡は12世紀初頭以降であった可能性が指摘された。(附録 自然化学分析参照)

特に駒林遺跡第1地点の場合は、溝跡の覆土中に茶毬跡が構築されており、茶毬跡1で検出した炭化材の年代測定を行ったところ、中世(AD1316-1606)の結果を得た。溝跡は西側で北方向へ直角に曲がり、第2地点の溝1や、平成16年度試掘、平成9年度試掘③で確認した溝5に連なると思われる。また、平成9年度試掘①、②で確認した東西方向の溝跡や、第3地点の溝1が同一造構であった場合は、1辺150m前後の台形の方形館跡の想定も可能であるが、方形内で館跡に伴うような造構の検出はまだない。

松山遺跡第41地点は試掘調査で中世末から近世初頭の溝を検出し、遺跡範囲の拡大となった。溝跡は並行して2本検出し、道跡の側溝と思われる。『新編武藏野風土記稿』によれば、この地は松平信綱が川越藩主のときに開発され、「福岡新田」として1648(慶安元)年の検地で福岡村から分村した。なお、「福岡」の名は「北条氏所領役帳」に載っており、戦国期には村落が成立していた。(木村他2000) 戦国以降近世初頭に行われた新田開発に伴う造構の可能性もあり、遺跡の範囲もより東へ拡大する可能性を秘めている。今後注意が必要である。

【近世】駒林遺跡第3地点で検出した大型土坑は、近世遺物を伴う。探土坑の可能性がある。

本村遺跡第117点の場所は「椎原様」「久田跡（きゅうだいれんあと）」と地元の人に呼ばれており、明治5年の「東原及び市沢公園」でも「寺社跡」になっている。また、新井家文書の「神社・仏閣絵図」に「久田社」と描かれた個所があり、位置的にみて今回調査した場所であったと思われる。しかし、明治末年の神社合祀政策により「久田神社」は「氷川神社（根上神社）」に合祀され、以来、跡地は畠となつた。

今回の調査で検出した溝跡で囲われた区画地は、明治5年の公園にある寺社跡と位置・形状が一致している。旧道（平成元年に区画整理で廃道）はこの場所でクランク状に曲がるが、旧道と接する部分は溝がなく、幅5mの間口が開いており、間口の北側には柵列跡や炭化した木材が出土した。また、間口の東側から区画地の南へ向かって幅1mほどの硬化面が続く。南側は地山が小高く残っており、社殿の場所であったとすれば、硬化面は参道の可能性がある。

明治年間に描かれた「神社仏閣絵図」によれば、久田社は北側に鳥居、南側に社殿が描かれる。また、明治五年九月の「社地境内取調帳」に掲載された絵図では、左下隅に鳥居があり、右上奥に本社が描かれている。「神社仏閣絵図」の向き（鳥居を北、社殿を南）

にすれば、調査で検出した道状の硬化面の向きと小高い区画の位置関係とも合致する。

明治三年十二月の「大井町神社書上帳」によれば、

久田神社	但シ式外
社前建物	不相分
社間数	勸進年期
祭日	間口六尺
三月十五日	奥行五尺五寸
間口五間	木鳥居六尺
奥行九間	革無御座候
地所古來通沿	地所古來通沿
有り	無

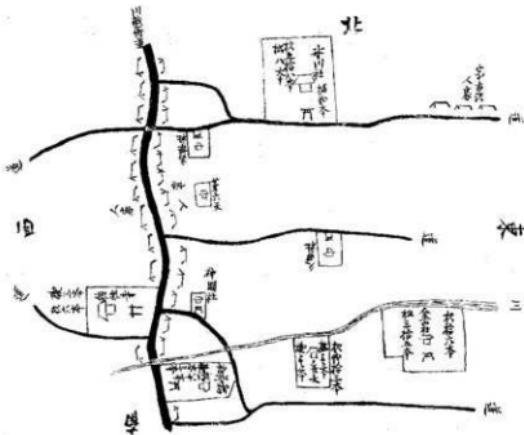
である。溝で囲われた内寸は12×21.5mで五間九間よりは若干広いが、比率は同じである。

以上から本地点は久田神社跡であり、調査により社地を取り囲む溝を検出することができた。（高崎直成）

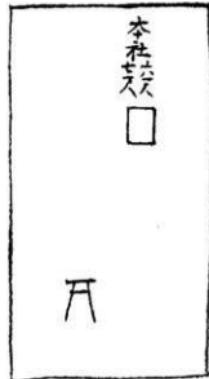
註（1）「古代入間を考える会」坂野千登勢氏の御教示による。

引用・参考文献

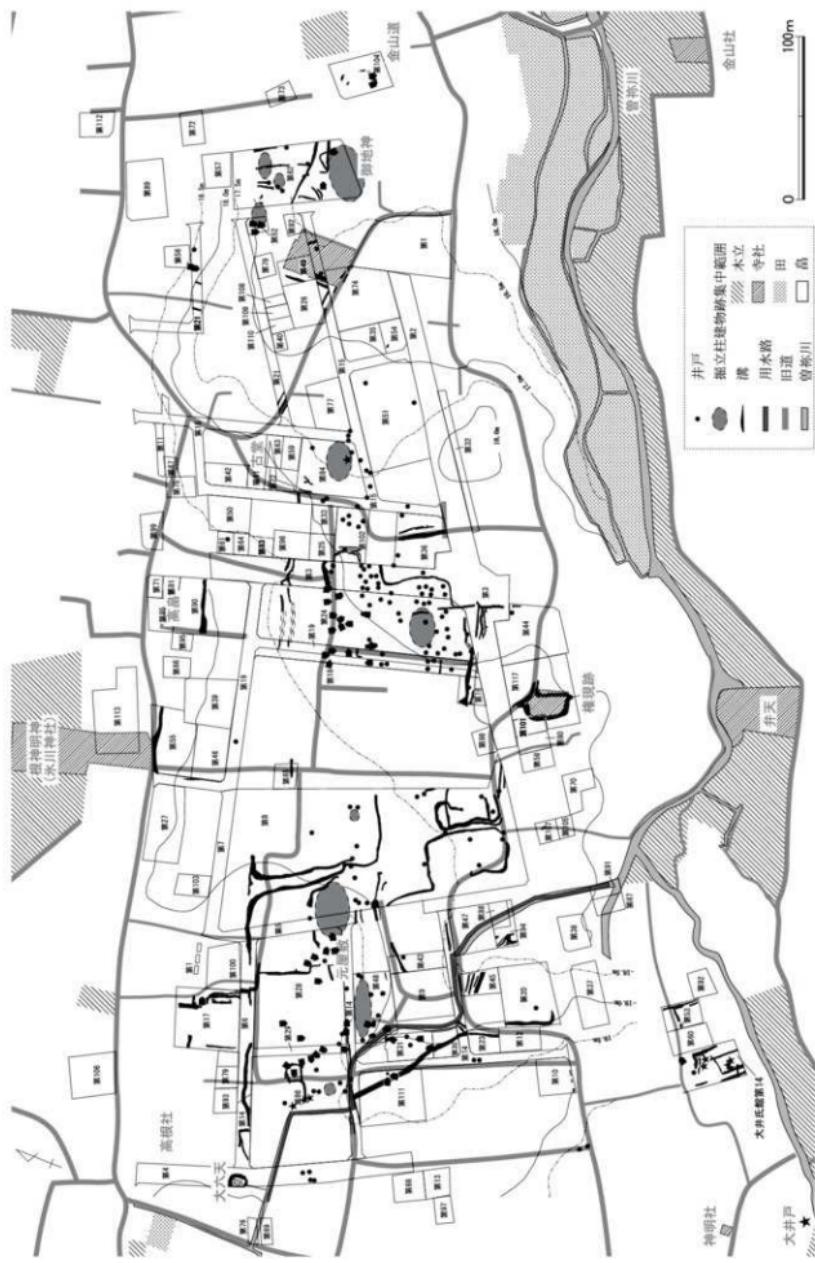
- 木村立彦・工藤宏・橋本鶴人2000「Ⅳ近世第1章二村の成立」
- 「上福岡市史通史編上巻」上福岡市教育委員会
- 桜井聖情2005「まとめと問題点」「西ノ原遺跡Ⅳ 東台道路Ⅴ」
- 埼玉県大井町道路調査会
- 坂野千登勢2005「再利用された土器群の考察」「若葉台道路発掘調査報告書Ⅵ」坂戸市教育委員会
- 大井町教育委員会「大井町神社書上帳」「大井町史資料編Ⅲ—1 近代」7頁
- 「神社仏閣絵図」（新井家文書2-14170）
- 「社地境内取調帳」（大井一区所蔵文書一一-106）



第196図 神社仏閣絵図（50%縮小）



第197図 社地境内取調帳（久田神社境内）



第198図 本村遺跡分布図 (1/3,000)

第2章 神明後遺跡出土の縄文時代中期塗彩土器について

I はじめに

神明後遺跡から赤色塗彩によって文様が描かれた土器が出土した。縄文時代中期の彩色された浅鉢については近年集成が図られており（中山2005）、ともすれば見逃しがちな塗彩土器について注意が促され、類例も増えてきたところである。今回、塗彩文様のある土器を報告するにあたり、埼玉県内出土の縄文時代中期の塗彩された土器について簡単な集成を図り、その上で塗彩文様のある土器の位置づけを行ってみたい。

II 塗彩のある土器

市内では、塗彩された縄文土器をいくつか検出している。最古の土器は縄文時代前期の諸磯b式で、鷺森遺跡で2点検出した。続いて、中期前葉猪沢式の浅鉢2点、新道式の浅鉢2点を亀居遺跡で、勝坂末の浅鉢は西ノ原遺跡の住居3軒（16・17・60号住居）と東台遺跡の住居2軒（92・147号住居）で、加曾利E I新式では西ノ原遺跡2軒（77・176号住居）、神明後遺跡5軒（6・17・18・21・22号住居、集石7）で浅鉢と有孔鈎付土器。加曾利E IIは西ノ原遺跡3軒（65・66・68号住居）、東台遺跡1軒（45号住居）で浅鉢と有孔鈎付土器を検出している。

西ノ原遺跡内で塗彩土器が多く出土した住居は60・65・66・176号住居である。60号住居は覆土中層に完全形土器を含めて多量の遺物が出土したが、土器の中に異系統（大木8a新相）が多いという特徴をもつ。66・176号の位置する一帯は、遺跡内で最も住居が密に重複する場所で、蛇紋岩製の小形磨製石斧などがまとまって出土した。

神明後遺跡の18・22号住居も土器の一括大量投棄があり、22号住居には異系統の土器が多く、西ノ原60号住居と似た特徴をもつ。

土器出土量の多い住居ゆえに塗彩土器が多いという可能性もあるが、塗彩土器の出土分布には注意が必要があろう。

県内（市内を含めて）出土の縄文時代中期の塗彩土器は35遺跡（註1）で検出しているが、勝坂末から加曾利Eに集中する。（第199図及び第91表参照）

第90表 埼玉県内出土塗彩土器集成表

塗彩部位 器種	内面 面	外画 のみ	内面 のみ	合計	a	b	c	d	e
浅鉢・鉢	48	32	45	125	27	28	4	3	17
壺	2	3		5	2				4
瓢形口付	3	1		4	4				3
有孔鈎付	3	9	4	16	1				
皿				1	1				
台付		1		1					
深鉢		1	2	3		1			
その他の	4	3	1	8	4			6	1
合計	60	50	53	163	38	29	4	16	18

県内出土の塗彩土器は、第90表が示すとおり、浅鉢が大半を占め、次に有孔鈎付土器が多い。両者には無文と隆帶・沈線などの文様を持つ土器が存在する。塗彩部位によって類別すると以下のようになる。

- a. 全面
- b. 口縁部
- c. 隆帶文様上
- d. 沈線・微隆帶等に開われた文様帶内。
- e. 塗彩によって文様を描く

以上のうちb口縁部はcやeとの組み合せ、すなわち口縁部文様帶に塗彩されることが多く、eの場合は内外面に塗彩文様のある場合と、内外面どちらかが文様で残りは全面塗彩等の場合がある。また、口縁部の塗彩は屈曲部分で区切られることが多い。

しかし、塗彩は土器の一部で確認できることが多く、ほとんどは剥離していると思われる。報告では「一部に痕跡」と記述していることが多い。実際、市内出土の遺物も一部の痕跡から塗彩を判断できるに過ぎない。また、隆帶上を塗彩する土器も一部の痕跡であることから、隆帶以外の場所も塗彩している可能性も残るわけである。特に破片の場合は文様を描いたものか、全面塗彩なのかの判別は困難である。

以上不備な点が多々ある上での集成であるが、あえて県内の傾向を示すと以下のようになる。

- 塗彩される土器は浅鉢、特に大・中型の浅鉢が多い。
- 勝坂末から加曾利E IIIにかけて、隆帶文様を持つ浅鉢が塗彩される。特に隆帶上を塗彩する例がある。
- 加曾利E IからE IIにかけて塗彩文様の浅鉢が確認できる。特にE I新に多い。

●加曾利E I新以降の有孔鉢付土器に塗彩が確認できる。特にE I・IIには浅鉢同様無文の土器が存在する。

●加曾利E III以降、沈線や微隆起線で塗彩範囲を区画する例が増える。

III 塗彩によって文様の描かれた土器

神明後遺跡17号住居跡から出土した浅鉢（第137図No12）は、赤色顔料（註2）で文様が描かれていた。文様は懸垂文と半円形の周囲を2本の細い平行線で囲うもので、土器の半分以上が欠損しているため確実ではないが、おそらく四分割して文様が配置されていると思われる。基本的に加曾利E式土器の文様構成と同じである。口縁部は内外面とも赤色塗彩されていた痕跡がある。特に内面の一部は、煤もしくは黒色顔料の上に赤色顔料が塗られており、細かくひび割れていった。

神明後遺跡22号住居跡出土の浅鉢（第161図No33）内面底には、2本の円弧文様が赤色塗彩されている。下地として黒色塗彩の痕跡がある。

西ノ原遺跡第128地点では176号住居で3点、トレンドチで1点、文様のある破片が出土した。特にNo26は「U」字形に黒色顔料と赤色顔料で塗彩しており、黒い縁取りがなされているように見える明確な文様である。

県内で見つかった塗彩文様のある縄文中期の浅鉢は普見の限りでは以外と少ない。

富士見市針ヶ谷北通遺跡2号住居からは加曾利E I新式期の見事な文様が描かれた浅鉢が出土している。内面は渦巻状と弧状の文様、外縁は二叉、三叉の放射状に赤色塗彩されている。

所沢市膳棚遺跡6号住居では内面に渦巻文様が黒色塗彩された浅鉢破片、12号住居では内面に渦巻状と弧状文様が赤色塗彩された浅鉢破片が検出されている。

飯能市堂前遺跡では遺構外ながら外面に渦巻き文様を赤色塗彩した浅鉢破片が出土している。

日高市宿東遺跡では、3号住居跡で内外面に文様を持つ浅鉢破片が出土しているが、赤色塗彩と黒色塗彩で文様が塗り分けられている。46号住居跡で内面に文様が赤色塗彩された浅鉢破片が出土する。

毛呂山町まま上遺跡では外面に楕円区画文様が赤色塗彩された浅鉢破片が出土している。

さいたま市寿能遺跡では縄文時代中期から晩期までの塗彩土器が報告されているが、報告文でI期とされる中期後葉から後期初頭の土器は19点が掲載されている。加曾利E III・IV、称名寺の土器は、微隆起線や沈線などで囲われた中を塗彩しているが、加曾利E I～IIの土器は文様区画内を塗彩したもの他に、赤色で内外面に円形か渦巻の文様を描き、「赤塗塗の部分の他に、黒塗（もしくは生漆塗）の部分認められ」「黒色は下地としてもしくは下地のごとく用いられ」ていた。I期の赤色顔料は分析の結果全てベンガラであった。ただ、漆膜は分析の結果ではなく観察結果の判断である。（成瀬1984）

深谷市深谷町遺跡出土の土器も加曾利E III・IVで、微隆起線で囲われた中を塗彩しているが、1点だけ弧状の帶が内面に描かれた条線文土器が出土している。

おそらくこの他にも塗彩された縄文中期の土器は存在すると思われる。県内の報告書を全て調べていないなどの不備もあるが、塗彩されていても剥離していたり、残っていても塗彩が文様なのか一面なのかは不明である。

数少ない県内出土の塗彩文様のある土器をまとめる以下になる。

- 器種は浅鉢。
- 文様のモチーフは渦巻き・円弧（連弧、楕円）が主。
- 文様は内面のみ・外面のみ・内外両面に描かれる。ただし破片や顔料剥落などの理由で不明の場合もある。
- 塗彩は赤色のみ・黒色のみ・赤黒二色（黒色下地に赤色塗彩を含む）
- 時期は加曾利E I～E II期に多い。（註3）

IV まとめ

明確な塗彩はともかく、ほとんどは赤色が僅かに残っていたり、色がくすんで塗彩かどうかの判断がつきかねるものもある。赤色塗彩の場合は、外面に斑もしくは放射状に残る橙色や茶褐色の痕跡が、焼成ムラによるものか塗彩なのか。また、黒色塗彩についても同様に焼成時の黒斑かどうかの判断が難しく、黒色塗彩といった認識もなく取り扱われている可能性が高い。

仔細に観察すれば、塗彩土器の比率が高まる事例もあり（尾形2007）、中山氏が指摘するとおり、無文の浅鉢が塗彩されている可能性が高いとすれば、塗彩土器の比率はもっと高くなる。今後は塗彩の有無をよく確認するとともに、無文浅鉢＝塗彩土器の可能性を考慮し、浅鉢の出土量や出土分布を把握していく必要がある。浅鉢の出土量や分布の特徴があるかないかにより、浅鉢が特殊なものか普通のものかの性格も見えてこよう。

一方塗彩文様のある土器は、塗彩が文様であるかどうか最も不明な土器片が多いと思われるので、明言はできないが、文様のモチーフは県外（関東地方）を見ても渦巻き・円弧・鋸歯が主体で、神明後遺跡17号住居跡出土のモチーフは珍しいといえる。

今後は県内の報告を仔細にあたり資料を蓄積したうえで塗彩土器と塗彩文様について再度検討を試みたい。

最後になったが、日本考古学協会員の今井堯氏には本稿をまとめるに当たり数多くの御教示をいただいた。また、埼玉県による調査（教育委員会・遺跡調査会・埋蔵文化財事業団）で出土した塗彩土器を検索するにあたり、事業団の栗岡潤氏に多大なるご尽力をいただいた。事業団の大屋道則氏には顔料の分析にあたって便宜いただいた。記して謝意を表す次第である。

（高崎直成）

註

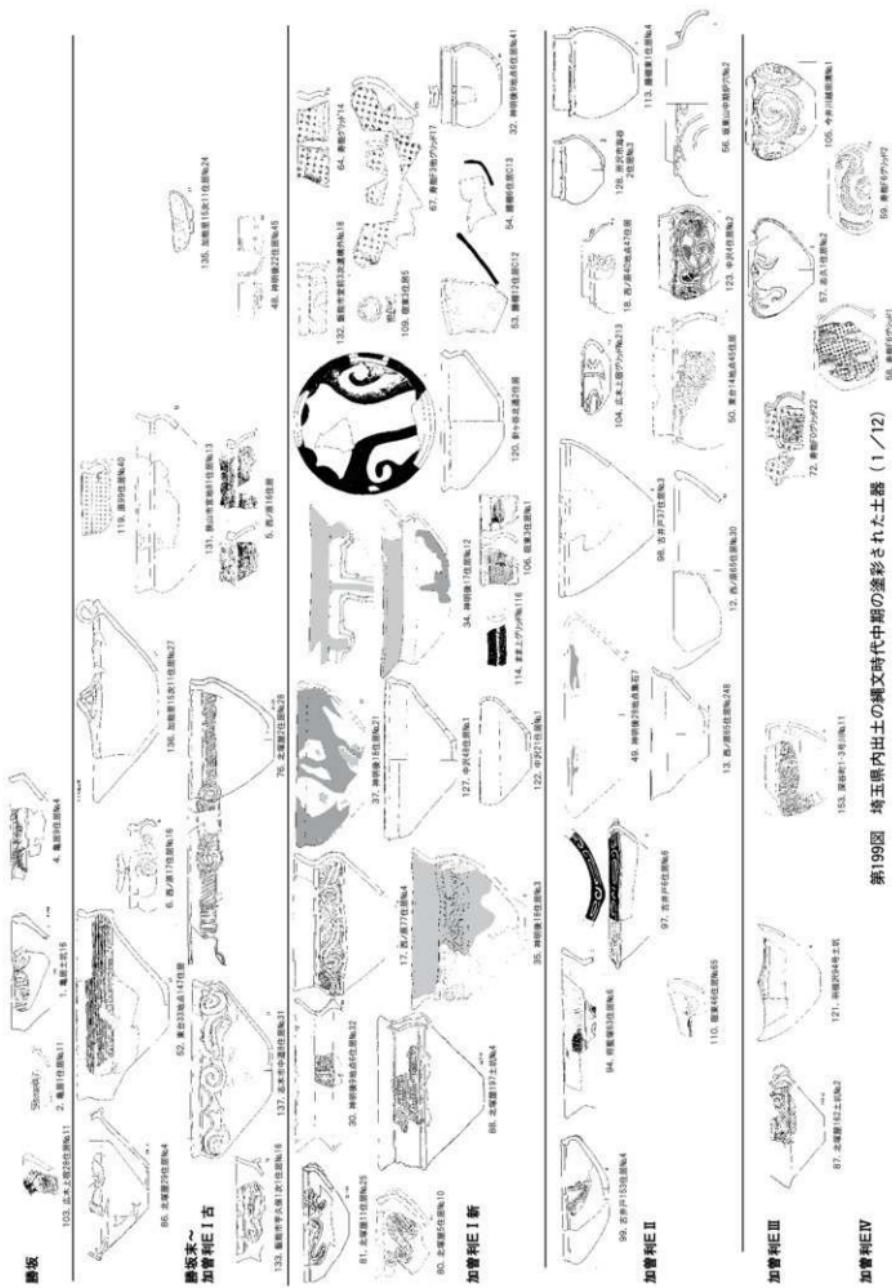
- (1) 県内市町村の報告についてはすべてをあたる時間がなかったため、入間地区と北足立郡南部（志木市、朝霞市、新座市、和光市）のみの集成である。また、記述の見落とし等もあると思われる。機会を見て県内の再集成を行ってみたい。
- (2) 埼玉県立埋蔵文化財センターで、塗彩面を蛍光X線で分析した結果、水銀の成分は検出されていないので、顔料はおそらくベンガラ（酸化第二鉄）と思われる。
- (3) 「中山2005」においても、塗彩による文様描写的ある浅鉢は、8・9期（勝坂II）に現れ、10期（加曾利E1）が最盛で11期（加曾利E2）まで継承するある。

集成一覧掲載報告書

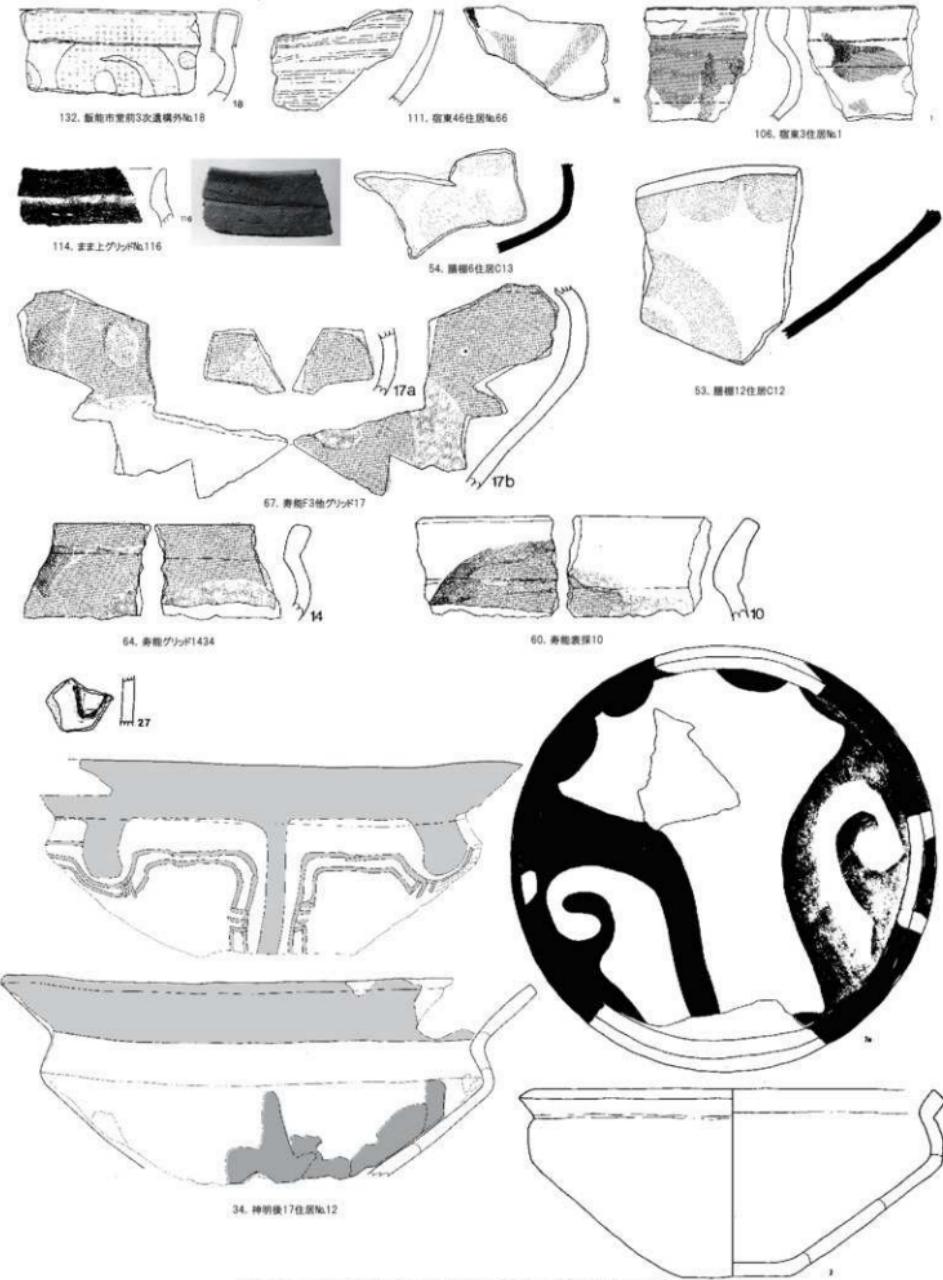
1	大井町遺跡調査会1996大井町遺跡調査会報告第6集〔電柱遺跡〕
2	大井町遺跡調査会1992大井町遺跡調査会報告第3集〔庵居遺跡（第29地点）〕
3	大井町遺跡調査会1996大井町遺跡調査会報告第6集〔西ノ原遺跡〕
4	大井町教育委員会1990文化財調査報告第20集〔東部遺跡群X〕
5	大井町教育委員会2003文化財調査報告第34集〔市内遺跡群X-I〕
6	大井町遺跡調査会2000大井遺跡調査会報告第18集〔西ノ原遺跡〕
7	大井町教育委員会2000文化財調査報告第31集〔市内遺跡群I〕
8	ふじみ野市教育委員会2007ふじみ野市埋蔵文化財調査報告第4集〔市内遺跡群I〕
9	大井町教育委員会1989文化財調査報告第18集〔東部遺跡群X〕
10	大井町教育委員会2005文化財調査報告第36集〔市内遺跡群X-II〕
11	大井町遺跡調査会2005大井町遺跡調査会報告第17集〔西ノ原遺跡群・東部遺跡V〕
12	埼玉大学考古学研究会1970MUR75号〔櫛標〕
13	埼玉県教育委員会1973埼玉県遺跡調査会報告書第1集〔岩の上-池子山〕
14	埼玉県教育委員会1973埼玉県遺跡調査会報告書第2集〔坂東山〕
15	埼玉県教育委員会1995埼玉県遺跡調査会報告書第31集〔北久遺跡〕
16	埼玉県教育委員会1984「寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書」-人工遺物-総括編-
17	財团法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団1982第8集〔下南原〕
18	財团法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団1985第48集〔北坂山II〕
19	財团法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団1986第63集〔符麻屋〕
20	財团法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団1987第66集〔北・八幡谷・相野谷〕
21	財团法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団1989第75集〔古井ノ谷〕
22	財团法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団1993第125期〔中井遺跡〕
23	財团法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団1993第131期〔谷津・二反田・下向山〕
24	財团法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団1997第185集〔古木宿遺跡〕
25	財团法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団1997第191集〔今井川橋遺跡群III〕
26	財团法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団1998第197集〔宿東遺跡〕
27	財团法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団1999第214集〔宿北遺跡〕
28	財团法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団1999第215集〔勝桜東遺跡〕
29	財团法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団2001第242集〔まよ上遺跡〕
30	財团法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団2004第295集〔原ノ崎前・篠山堂根・相野谷・向原・北〕
31	富士見市遺跡調査会1984富士見市遺跡調査会報告第23集〔御ヶ谷遺跡群〕
32	富士見市教育委員会1992富士見市文化財報告第42号〔富士見市遺跡群X〕
33	富士見市遺跡調査会1998富士見市遺跡調査会報告第49号〔中井遺跡II-2・10地点〕
34	富士見市遺跡調査会1999富士見市遺跡調査会報告第52集〔勝瀬原遺跡群〕
35	富士見市教育委員会2000富士見市文化財報告第52号〔富士見市内遺跡群〕
36	所沢市教育委員会2000所沢市埋蔵文化財調査報告書第22集〔海谷遺跡〕
37	狛山市遺跡調査会1998狛山市遺跡調査会報告第12集〔遠低岡遺跡〕
38	狛山市遺跡調査会2003狛山市遺跡調査会報告第13集〔丸山遺跡〕
39	狛山市教育委員会2007狛山市文化財調査報告第26集〔宮地遺跡第6次調査〕
40	飯能市教育委員会1986飯能市内遺跡発掘調査報告書3〔飯能の遺跡(3)〕
41	飯能市教育委員会1991〔飯能の遺跡(1)〕
42	飯能市遺跡調査会1992飯能市遺跡調査会発掘調査報告書7〔加曾里遺跡第13号調査〕
43	飯能市教育委員会2001〔飯能の遺跡(30)〕
44	志本市遺跡調査会2007志本市遺跡調査会調査報告第12集〔中道遺跡第65地点〕
45	深谷市教育委員会1985埼玉県深谷市埋蔵文化財調査報告書第9集〔深谷市遺跡〕

引用・参考文献

- 青柳美雪2007 「縄文時代中期の浅鉢について」志本市遺跡調査会調査報告第12集「中道遺跡第65地点」志本市遺跡調査会
 中山真治2005 「縄文時代中期の彩色された浅鉢についての覚え書き－関東地方西南部の中期集落資料を中心に－」『東京考古学23』東京考古談話会
 成瀬正和1984 「赤色塗彩土器・漆塗土器・漆波容器について－赤色顔料の科学的分析結果などから－『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書』－人工遺物・総括編－埼玉県教育委員会



第199図 埼玉県内出土の縄文時代中期の塗彩された土器（1／12）



第200図 埼玉県内出土の塗彩文様のある土器集成 (1 / 4)

120. 針ヶ谷北通2住居

第3章 ふじみ野市内における縄文時代中期の継続型集落について

ふじみ野市内には、縄文時代中期の集落遺跡が22箇所存在する。このうち、上福岡地区には3箇所（西・ハケ・権現山遺跡）のみしか中期住居跡が確認されていない。この内、西遺跡は大井地区の遺跡立地と同様のあり方を示しているので実質2箇所となる。このことは中期集落の立地と深くかかわっている。つまりふじみ野市域の西側は武藏野台地、東側は荒川低地にまたがり海拔標高は台地最高部で49m、荒川低地部で6m弱で、高低差は43mを超える、縄文時代前期集落が武藏野台地へり際に多く立地（上福岡地区）するに比較して、中期の集落は台地へりからやや内陸に3~4km、湧水川を巡るように位置する（大井地区）傾向が読み取れる。

この小稿では、中期に限定して土器型式にして4~5期の短期継続型集落3遺跡と土器型式10期以上の長期継続型集落2遺跡を概観し、遺跡の在り方を考える素材を提供していきたい。

I 短期継続型集落の特徴

亀居遺跡は、福岡江川と呼ぶ湧水川の湧水部の台地上にある遺跡であり、今回報告分を含めて16棟の竪穴住居が知られている。本報告の16号住居には炉内埋設（炉体）土器があり、既報告の2号住居の炉体土器に酷似した阿玉台II式古相の特徴をもつものであった。亀居遺跡の住居は、炉部未掘の13号住居を除き、すべての住居が炉体土器をもっており住居の時期は明確であり、それらすべては亀居I期（阿玉台I b式古相・猪沢式新相）から亀居IV期（阿玉台II式新相・藤内式古相）の間である。集石土坑・土坑・ピット・落し穴などの遺構出土の土器も、これらの土器と同様である。

土坑・ピットを中心には竪穴住居が環状に取り囲み、その外に落し穴が配置される構造をもつ集落であるが、竪穴住居の複合関係はまったく見られず、また加曾利E式期の土器片等もまったく出土しない。これは長期継続型の大集落である東台遺跡や西ノ原遺跡と対照的な特徴といえる。亀居遺跡の調査率は40%を超えており、集落の住居総数は25軒前後となろう。粘土貯蔵穴や焼粘土塊の存在から、土器作りを行ったムラではあ

るが、同時に存在した住居数は5軒を超えない。以上が短期継続型集落である亀居遺跡の一般的特徴である。

江川南遺跡は、亀居遺跡からやや福岡江川下流域の対岸の南側低位台地上にある遺跡で、本報告を含めて竪穴住居跡6軒が確認されている。これらは阿玉台II式古相・新道式新相から、藤内式新相にわたることが炉体土器から明らかである。土坑・ピットや遺構外出土の土器も同様である。このことから亀居遺跡にやや遅れて出現し、消滅もやや遅れるという特徴をもつといえる。

出土土器のうち、併行する阿玉台土器は時期が新しくなると共に減少し、勝坂系土器の比率が増大する。江川南遺跡自体が亀居遺跡よりも、開始も消滅も遅れることを反映して、阿玉台系よりも勝坂系の比率が多くなる。浅鉢というより舟形無文土器も注目される。

江川南遺跡の調査率は約4分の1であり、今後、住居を始めとする遺構の増加は予想されるが大集落にはならない。連続する3~4時期の遺構群をもつ短期継続型の小集落である。僅か6軒とはいえ住居相互の切り合い関係が全く見られないことも亀居遺跡と共通した江川南遺跡の特徴である。

亀居遺跡と江川南遺跡は、ともに中期前半の短期継続型集落遺跡の典型例といえよう。

II 神明後遺跡の集落としての特徴

神明後遺跡は、さかい川に面した南側の低位台地上にある旧石器時代、縄文時代、古代、中近世の複合遺跡である。今回報告する第28地点の調査では古代の住居2棟と中世の溝も調査されたが、縄文中期の遺構と遺物の多彩な資料が注目される。特徴を要約する。

- 1 縄文中期後半の竪穴住居12棟が調査されたこと。
- 2 これらの多くは、重複・複合関係を持っている。
- 3 中期前半の集石遺構と遺物も出土した。
- 4 浅鉢の内面全面に文様的に彩色された土器が調査された。多摩丘陵東北部では初の資料である。
- 5 大きい浅鉢と有孔鈎付土器に赤彩著しい土器が大量に出土した。加曾利E I新期の生活に集中している。

6 複弧半隆帯文のみで、撫糸文・縄文など地文を持たない土器が加曾利E I期に大量に出土した。

神明後遺跡は、これまで中期後半の短期継続型集落と見なされてきた。阿玉台I b式新相の住居1軒が知られているが、中期後半の住居密集部から離れた位置にあったためである。この遺跡は中期前半の集石造構や遺物の出土と、中期前半の住居は一般に台地縁より奥部に多いこと、遺跡の発掘率が2割に達していないことから、中期後半（加曾利E各期）の継続型集落ではあるが、短期継続型集落と断定するのは尚早といえる。

石棒片の転用や屋外埋葬が人体埋葬も知られている縄文中期の集落である。

III 長期継続型集落の特徴

先の短期継続型集落に比較して、ここで扱おうとする市内の縄文中期長期継続型集落は、住居件数が100件以上確認され、縄文時代中期のほぼ全期間にわたって住居跡が確認されている集落をさす。具体的には大井地区の2つの遺跡、一つは西ノ原遺跡、もう一つは東台遺跡を取り上げる。ともに武藏野台地北東部における最大級の縄文時代集落遺跡である。

ここでは次の視点で概論を進め、
①住居が営まれてから、廃絶に至るまでの集落変遷
②拠点集落として機能したのはいつの時期なのか
を検討してみる。長期継続型集落を大別して形成期・発展・盛期・衰退期の3期に分けて、土器形式から分類した。ただ、両遺跡とも遺跡範囲内における未調査部分も多く、未だ全貌が明らかになったとは言えない状況ではあるが、今後の検討材料に資する立場で記述する。

西ノ原遺跡を取り上げる。福岡江川同様の湧水川で富士見境を流れる「さかい川」の右岸に位置し、新河岸川の河口から約3kmの内陸に位置する。旧石器時代・縄文時代早期～後期・平安時代・中世に亘る複合遺跡である。総面積は約10haで、発掘調査率は約40%である。縄文時代の遺構と遺物は、早期・前期・中期・後期前半に亘っている。中期の中でも、中期初頭は希薄であり、中期末の加曾利E IV期も無いに等しい。遺跡の主体は、縄文時代中期前半の阿玉台式I b期か

ら加曾利E III期にかけての時期である。

2008年3月現在で、141地点に及ぶ調査で180軒を超す住居跡が環状集落として形成されていることが判明した。これまでの調査率からみて堅穴住居の総数は220～250軒に達すると思われる。

縄文中期集落としての西ノ原遺跡は、大別して形成期・発展・盛期・衰退期の3期に分けられ、土器形式から細分して13期まで分類できる。

形成期は、阿玉台I b期から勝坂II期新相（西ノ原1期～5期）までで、西ノ原集落の基盤となった段階である。特徴は、住居相互は30～50m離れて遺跡の西側から南部にかけて弧状に7軒が配置され、さかい川に向かって下る北向きの緩斜面の上部に分布し、広場を取囲むという住居配置には至っていない。先述した亀居遺跡の亀居I～IV期に対比される時期である。この期は亀居遺跡と比較して、住居数・集石土坑をはじめとする遺構数・住居の規模とともに劣るといえる。ただ、住居相互の切り合いがないというのは共通している。このことが当該期の特徴ともいえなくもない。

発展～盛期 勝坂III期から加曾利E II期に至る期間である。この期に遺跡中央を中心として、住居が円弧上に配置される勝坂III期から加曾利E I古期までと、遺跡の東寄りを中心に住居が配置される加曾利E II期とに分けられる。住居は深く作られ、壁溝を持ち、建替や拡張が一般的に見られ、住居南入口部に埋葬が出現するのは加曾利E I古式期であり、その後も継続する。朱塗土器・有孔鈎付土器が目立ち、焼粘土塊出土から集落内の土器作りが確認され、土製品や土製円板も多く出土し始める。全ての住居に多いではなく、特定の住居にのみ多い特徴がある。65号住居からは23個の土製円板が出土している。加曾利E II式期が最盛期となり73軒が確認され、遺跡の東側に住居分布の中心が移り、それまでの環状からは東におよそ100m程ずれた位置に新たに環状集落が形成された。

また、祭祀を思わせる遺物群や、軟玉製品や、異系統の土器が特に多い住居もあり拠点集落としての要件を備えてきている。西ノ原遺跡が拠点集落として機能したのは、勝坂III期から加曾利E II期にかけての時期である。また、その後半の加曾利E II期には、住居配置の中心が東に移動することの他、中央部では住

居配置円弧の交点に当たることから、住居の重複、切り合いが著しい特徴がある。

重要な特徴として、墓坑と推定できる遺構群が住居空白部に数多く見られることである。

衰退期 加曾利EⅢ・EⅣ期である。

EⅢ期の住居1軒のみで、EⅣ期には住居は作られなくなる。墓坑だけは、加曾利EⅢから加曾利EⅣ期にも引き続いて作られ、かつての生活の場であった祖先の住んだ地に、墓つくりだけが行われるという残暁期で、後期の堀之内期の墓坑も確認される。

この後、西ノ原遺跡に住居は作られなくなり、さかい川下流に沿った神明後遺跡や苗間東久保遺跡に居住地を替えた可能性とも考えられる。

東台遺跡 前述の西ノ原遺跡の南わずか約1km、狭山丘陵北麓を水源とする砂川が唯一縦線を形成する右岸の台地上で、河口より3km入り込んだ内陸の遺跡で、17haの広がりをもつ拠点集落である。44地点での発掘調査が行われ時期不明住居跡を除いても153軒の縄文時代住居跡が確認されている。調査率6割。

形成期 勝坂II式期以前の集落をいう。現時点で確認されている縄文時代中期住居跡の内、最も古いのは141号住居で弥生期に位置づけられる。西ノ原遺跡が阿玉台I・b期古相が最古であるので、極めて近い時期に集落が形成され始めた事は共通し特徴的である。

遺跡中央部から東部にかけて散在し、砂川に向かって下りる緩斜面の上部に分布する。

発展～盛期 勝坂III式期～加曾利EⅡ式期で住居数が急増・密集して分布する時期である。これまでに98軒を確認。住居数のピークは43軒になる加曾利EⅠ新式期である。また遺跡中央部には9基の柱穴で構成される掘立柱建物跡が作られる。桁行7.72m・梁行3.9mを測り、主軸はほぼ南北方向を指す。これが遺跡のシンボル的存在になり、これを中心にしたように竪穴住居が分布する傾向になり、一般の住居は相互に重複が目立ち始めるが、掘立柱建物跡との重複は一切ない。この頃の集落は環状を形成し、その直径は120m前後が読み取れる。続く加曾利EⅡ式期には前の時期に比較しやや減少を始めるが、東側にも占地を広げてくる。

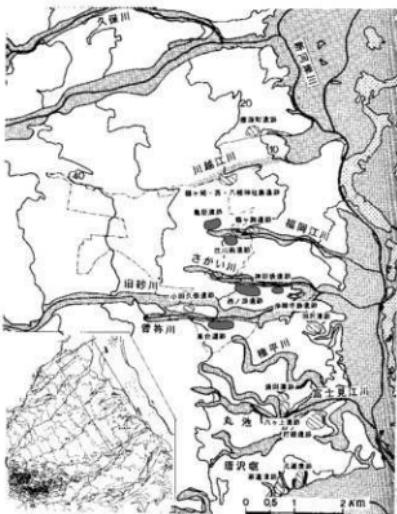
衰退期 住居数はやはり激減する。EⅢ式期で遺跡

東端部から4軒、EⅣ式期は遺跡西側から6軒を数える。後者はいずれも柄鏡形を呈する住居である。環状集落は崩れる。その後の後期に入り、7軒の住居が継続して作られ堀之内式の3軒をもって遺跡の終焉となつた。

西ノ原と東台両遺跡は水系は異なるものの、わずか1km離れただけで、ほぼ同面積で同時にかつ長期にわたって営まれた北武藏野を代表する縄文時代中期の長期継続型集落であり拠点集落である。

共に大きい樽型有孔鉢付土器も出土し、塗彩土器や異系統の土器が顕著であることと共通している。

(今井亮・坪田幹男)

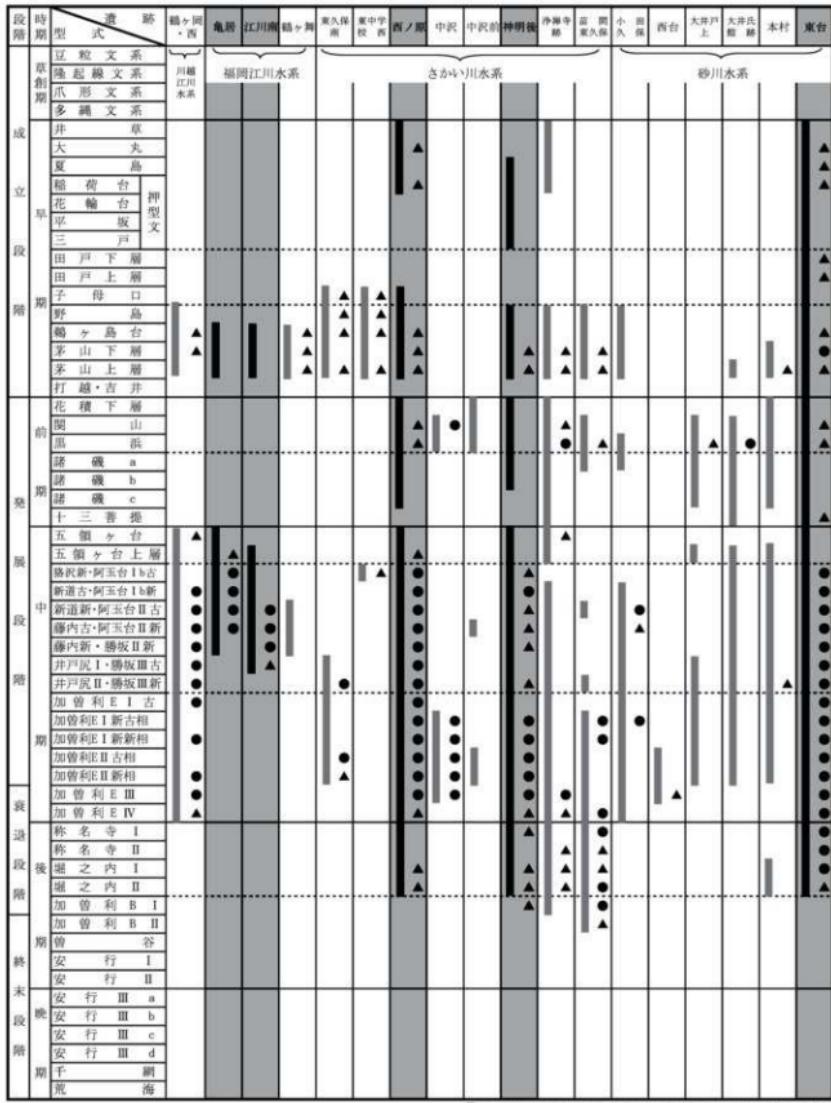


第201図 周辺中期前半遺跡分布

引用・参考文献

- 大井町遺跡調査会 『西ノ原遺跡』 大井町遺跡調査会報告第6集 1996年
- 大井町遺跡調査会 『亀居遺跡』 大井町遺跡調査会報告第8集 1998年
- 大井町遺跡調査会 『川崎川遺跡II・神明後遺跡I』 大井町遺跡調査会報告第16集 2005年
- 大井町遺跡調査会 『西ノ原遺跡IV・東台遺跡V』 大井町遺跡調査会報告第17集 2005年

第92表 ふじみ野市内縄文時代遺跡消長表（アミかけは本文で取り上げた遺跡）



■は遺物、●印は住居、▲印はその他の遺構（2008年3月現在）

附編 神明後遺跡および駒林遺跡におけるテフラ分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

埼玉県ふじみ野市（旧大井町域内）に所在する神明後遺跡および駒林遺跡は、武蔵野台地北部を構成する台地の一つである大井台に位置する。大井台は、南西—北東方向に流下して荒川低地に注ぐ福岡江川と砂川堀の2本の河川に挟まれた低位の段丘であり、2本の河川の間には、それらと平行して、さかい川が流れている。福岡江川と砂川堀のそれぞれの河川の対岸の段丘は、大井台よりも5mほど高い高位の段丘が広がっている。久保（1988）や貝塚はか総（2000）などによる地形分類図では、大井台は立川面に区分されており、その両側の高位段丘は武蔵野面のM2面に区分されている。なお、立川面については、上位より約4万年前のTc1面、約3～2万年前のTc2面、約2～1.5万年前のTc3面に細分されている（貝塚はか総、2000）が、大井台の詳細な地形面の対比は確認されていない。

神明後遺跡は、さかい川右岸の大井台平坦面上に位置し、駒林遺跡は、福岡江川右岸の大井台平坦面上に位置する。2006年に行われた神明後遺跡第28地点の発掘調査では、縄文時代中期とされる住居跡および集石などが多数検出されたほか、平安時代の住居跡1軒および時期不明とされた堀跡と溝跡などが検出されている。一方、駒林遺跡第1地点の発掘調査では、溝跡が検出され、さらにその溝跡の埋積過程において、茶毬跡や道路跡とされる硬化面などが検出されている。茶毬跡については、そこから採取された炭化材の放射性炭素年代で 480 ± 80 BPという値が得られているが、溝跡自体の年代は不明とされている。

本報告は、上記した神明後遺跡第28地点より検出された堀跡と駒林遺跡第1地点の溝跡覆土中に含まれる指標テフラの調査を行い、その構成年代について検討する。

1. 試料

（1）神明後遺跡第28地点

分析対象とされた堀跡1は、発掘調査資料によれば、さかい川と直交する形で南北方向に伸びており、上幅約350cm、下幅71～106cm、深さ200cmを測る薺研状の断面形態を呈する。覆土は、上位より1～9層に分層されている。このうち、1～8層は黒褐色～暗褐色を呈するいわゆる黒ボク土であるが、9層は褐色を呈するいわゆるロームからなる。

試料は、堀跡断面ほぼ中央より、最上部の2層とその直下の4層から堀底直上の9層まで厚さ10cm連続でサンプルNo.1～20が採取されている。また、上記した地点で一部の試料の採取にとどまった1,3層については、同層が厚く堆積する中央部右側より、同様にサンプルNo.21～29が採取されている。これらの試料の肉眼観察では、テフラに由来する碎屑物である軽石やスコリアなどが認められなかったことから、分析対象試料は、最上部覆土を除く3～9層までの各層位から各1点の計7点を選択した。試料の観察所見および分析対象として選択した試料を表1に示す。

（2）駒林遺跡第1地点

分析対象とされた大溝1は、発掘調査資料によれば、調査区北側から南北方向で本調査区に入り、本調査区内で直角に曲がり、東側へ向かう。上幅275～335cm、下幅64～69cm、深さ175cmを測る薺研状の断面形態を呈する。覆土は、上位より1～21層に分層されているが、1,2層は検出面全体を覆っていることから、実際の覆土は3層以下とみられる。覆土はいずれも黒褐色～暗褐色を呈するいわゆる黒ボク土であるが、覆土下部の20層および21層にはロームに由来する褐色土粒が多量に含まれている。このうち6～8、11～14、17～19の各層は、溝跡側壁にブロック状に堆積しており、溝跡の主体となる土層は、上位より3～5、9、10、15、20、21の各層となる。なお、4層と9層は、硬化面とされ、道路跡と推定されている。また、9層直下の10層相当からは、茶毬跡とされる遺構が検出されており、茶毬跡出土の炭化材は 480 ± 80 BPの放射性炭素年代を示した。（パリノ・サーヴェイ株式会社2007）

表1. 神明後遺跡第28地点堀跡1試料一覧

サンプルNo.	土色	備考	調査所見*	分析試料
1	暗褐色	径1~2mmの褐色土粒微量	1層上部/2層上部	
2	暗褐色	径1~2mmの褐色土粒微量	2層上部	
3	暗褐色	径1~2mmの褐色土粒微量	2層中部	
4	暗褐色	径1~2mmの褐色土粒微量	2層中部	
5	暗褐色	径1~2mmの褐色土粒微量	2層下部	
6	黒褐色(やや明るい)	径1~2mmの褐色土粒微量	2層下部~3~4層上部	
7	黒褐色(やや明るい)	径1~2mmの褐色土粒微量	4層上~中部	
8	黒褐色(やや明るい)	径1~2mmの褐色土粒微量	4層中部	●
9	黒褐色(やや明るい)	径1~2mmの褐色土粒微量	4層下部	
10	黒褐色	径1~2mmの褐色土粒少量	4層最下部~5層上部	
11	黒褐色	径1~2mmの褐色土粒少量	5層上~中部	
12	黒褐色	径1~2mmの褐色土粒少量	5層中~下部	●
13	黒褐色	径1~2mmの褐色土粒少量	5層下部	
14	黒褐色	径5mm以下の褐色土粒少量	6層	●
15	黒褐色	径2~3mmの褐色土粒多量	6層最下部~7層	●
16	暗褐色	径10~15mmの褐色土塊少量、径5mm以下の褐色土粒多量	7層下部~8層上部	
17	暗褐色	径10~15mmの褐色土塊少量、径5mm以下の褐色土粒多量	8層中部	●
18	褐色	径10~15mmの褐色土塊少量、径5mm以下の褐色土粒多量	8層下部~9層上部	
19	褐色	径10~15mmの褐色土塊少量、径5mm以下の褐色土粒多量	9層上~中部	
20	褐色	径10~15mmの褐色土塊少量、径5mm以下の褐色土粒多量	9層中~下部	●
23	黒褐色(やや明るい)	径1~2mmの褐色土粒微量	1層中部	
25	黒褐色(やや明るい)	径1~2mmの褐色土粒微量	1層下部	
27	黒褐色	径1~2mmの褐色土粒微量	3層中部	●

*資料および堀跡セクションの記載に基づく

表2. 駒林遺跡第1地点大溝1試料一覧

サンプルNo.	土色	備考	調査所見	分析試料
1	暗褐色	径1~2mmの褐色土粒少量	1層中部	
2	黒褐色	褐色土粒は認められない	1層最下部~2層上部	
3	黒褐色	褐色土粒は認められない	2層中部	●
4	暗褐色	褐色土粒は認められない	2層下部~3層上部	
5	暗褐色	褐色土粒は認められない	3層中部	
6	黒褐色(やや明るい)	褐色土粒は認められない	3層下部~4層上部	道路面?
7	黒褐色(やや明るい)	褐色土粒は認められない	4層下部~5層上部	
8	黒褐色	褐色土粒は認められない	5層中~下部	●
9	黒褐色(やや明るい)	径2~3mmの褐色土粒少量	9層上部	道路面?
10	黒褐色(やや明るい)	径2~3mmの褐色土粒少量	9層下部	
11	黒褐色	1mm程度の褐色土粒微量	10層	季見跡検出
12	黒褐色	1mm程度の褐色土粒微量	12層/15層上部	
13	黒褐色	1mm程度の褐色土粒微量	15層	●
14	黒褐色	1mm程度の褐色土粒微量	15層下部	
15	黒褐色	径5mm以下の褐色土粒中量	20層	●
16	黒褐色	径10~15mmの褐色土塊少量、径5mm以下の褐色土粒多量	21層上部	
17	黒褐色	径10~15mmの褐色土塊少量、径5mm以下の褐色土粒多量	21層下部	●

*資料および大溝セクションの記載に基づく

試料は、上記した溝跡において主体となる土層が認められる断面ほぼ中央より、1~21層までを対象に厚さ10cm連続でサンプルNo.1~17が採取されている。

これらの試料の肉眼観察では、テフラに由来する碎屑物である軽石やスコリアなどが認められなかったことから、分析対象試料は、2層と主要覆土から硬化面の4,9層を除く各層位より各1点の計7点を選択している。試料の観察所見および分析対象として選択した試料を表2に示す。

表3. 神明後遺跡第28地点堀跡1のテフラ分析結果

サンプルNo.	層位	スコリア			火山ガラス			軽石		
		量	色調・発泡度	最大粒径	量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径	
27	3層中部	+	B・b・B・sb・Br・sb	2.0	+	cl・bw	++	GBr・sb	1.2	
8	4層中部	+	B・b・B・sb・Br・sb	1.5	+	cl・bw	++	GBr・sb	1.2	
12	5層中～下部	+	B・b・B・sb・sb	2.0	+	cl・bw	++	GBr・sb	1.2	
14	6層	(+)	B・b・B・sb・sb	1.0	++	cl・bw	+	GBr・sb	1.2	
15	6層最下部～7層	(+)	B・b・B・sb・sb	1.0	++	cl・bw	+	GBr・sb	1.2	
17	8層中部	(+)	B・b・B・sb・sb	1.0	++	cl・bw	(+)	GBr・sb	1.2	
20	9層中～下部	(+)	B・b・B・sb・sb	1.0	++	cl・bw	(+)	GBr・sb	1.2	

<凡例>
—：含まれない、(+)：さわめて微量、+：微量、++：少量、+++：中量、++++：多量。

B：黒色、G：灰色、Br：褐色、GB：灰褐色、R：赤色、W：白色。
g：良好、sg：やや良好、b：やや不良、b'：不良、最大概径はmm。

cl：無色透明、bw：褐色、bw'：バブル型、md：中間型、pm：軽石型。

表4. 駒林遺跡第1地点大溝1のテフラ分析結果

サンプルNo.	層位	スコリア			火山ガラス			軽石		
		量	色調・発泡度	最大粒径	量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径	
3	2層中部	++	B・b・B・sb・GB・sb・Br・sb・Br・sg	2.0	(+)	cl・bw, cl・pm	++	GBr・sb	1.2	
5	3層中部	+	B・b・B・br	1.5	+	cl・bw	++	GBr・sb	1.2	
8	5層中～下部	+	B・b・B・br・b	2.0	+	cl・bw	++	GBr・sb	1.2	
11	10層	(+)	B・b・B・br・b	1.0	+	cl・bw	+	GBr・sb	1.2	
13	15層	(+)	B・b・B・br・b	1.0	+	cl・bw	+	GBr・sb	1.2	
15	20層	(+)	B・b・B・br・b	1.0	+	cl・bw	—			
17	21層下部	—			++	cl・bw	—			

<凡例>
—：含まれない、(+)：さわめて微量、+：微量、++：少量、+++：中量、++++：多量。

B：黒色、G：灰色、Br：褐色、GB：灰褐色、R：赤色、W：白色。

g：良好、sg：やや良好、b：やや不良、b'：不良、最大概径はmm。

cl：無色透明、bw：褐色、bw'：バブル型、md：中間型、pm：軽石型。

2. 分析方法

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。

なお、軽石または火山ガラスが検出された場合には、屈折率の測定を行い、テフラの特定のための指標とする。屈折率の測定は、古澤（1995）の MAIOT を使用した温度変化法を用いる。

3. 結果

（1）神明後遺跡第28地点堀跡1

結果を表3に示す。スコリアは、サンプル No.27、8、12（3層～5層）に微量、サンプル No.14、15、17、20（6層～9層）に極めて微量認められる。スコリアの特徴は、サンプル No.27、8、12では、最大径1.5～2.0mm、他の試料では最大径約1.0mm、黒色で発泡やや不良のスコリアおよび褐色で発泡やや不良のスコリアが混在し、サンプル No.27には黒色で発泡不良のスコリアも認められる。

火山ガラスは、サンプル No.27、8、12（3層～5層）に微量、サンプル No.14、15（6層～7層）に少量、サンプル No.17、20（8層～9層）に中量含まれる。いずれの試料においても無色透明のバブル型である。

軽石は、サンプル No.27、8、12（3層～5層）に少量、サンプル No.14、

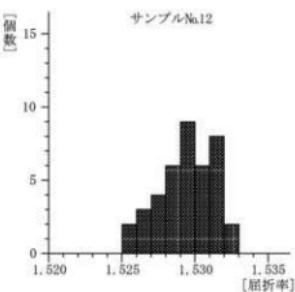


図1. 神明後遺跡第28地点堀跡1の軽石の屈折率

15（6層～7層）に微量、サンプルNo.17、20（8層～9層）に極めて微量含まれる。いずれの試料の軽石も、特徴は同様であり、最大径は約1.2mm、灰褐色を呈し、発泡はやや不良である。斜方輝石の斑晶を包有するものも認められた。

サンプルNo.12より抽出した軽石の屈折率の測定結果は、n1.525～1.532（model.529～1.530）であった（図1）。

（2）駒林遺跡第1地点大溝1

結果を表4に示す。スコリアは、サンプルNo.3（2層）に少量、サンプルNo.5、8（3層～5層）に微量、サンプルNo.11、13、15（10層～20層）に極めて微量認められ、サンプル17（21層）には認められない。スコリアの特徴は、サンプルNo.3では、最大径約2.0mm、黒色で発泡不良、黒色で発泡やや不良、灰黒色で発泡やや不良、褐色で発泡やや不良の各スコリアが混在し、少量の褐色で発泡やや良好のスコリアも認められた。サンプルNo.5から15までの試料では、最大径1.0～2.0mmの黒色で発泡やや不良、褐色で発泡やや不良の各スコリアが混在する。

火山ガラスは、サンプルNo.3（2層）に極めて微量、サンプルNo.5～15（3層～20層）までは微量、サンプルNo.17（21層）には少量含まれる。サンプルNo.3には無色透明のバブル型と軽石型が混在するが、それ以外の試料においては無色透明のバブル型である。

軽石は、サンプルNo.3～8（2層～5層）に少量、サンプルNo.11、13（10層、15層）には微量認められ、サンプルNo.15、17（20層、21層）には認められない。いずれの試料の軽石も、特徴は同様であり、最大径は約1.2mm、灰褐色を呈し、発泡はやや不良である。斜方輝石の斑晶を包有するものも認められた。

サンプルNo.8より抽出した軽石の屈折率の測定結果は、n1.527～1.533（model.529～1.530）であった（図2）。

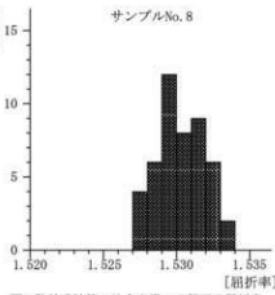


図2. 駒林遺跡第1地点大溝1の軽石の屈折率

4. 考察

（1）指標テフラの同定

神明後遺跡第28地点堀跡および駒林遺跡第1地点大溝のテフラ分析により検出されたテフラの碎屑物のうち、各試料に認められた軽石は、その特徴から、同一のテフラに由来すると考えられる。当社における標準試料との比較と軽石の屈折率から、これらの試料の軽石は、平安時代の天仁元年（1108年）に浅間火山より噴出した浅間Bテフラ（As-B：新井, 1979）に由来する。

両遺跡の各試料より検出されたスコリアについては、遺構の層位と調査区の地理的位置から、完新世に富士山より噴出したテフラである新期富士テフラに由来すると考えられる。新期富士テフラは、上杉（1990）による記載では、富士黒土層中のS-0から宝永スコリアのS-25まで記載されており、さらにこの中のテフラによつては、細分されているものもあり、50枚近くのテフラにより構成されている。ただし、給源から離れた神奈川県東部や東京都においては、これまでの低地の調査例から、検出される新期富士テフラの枚数は極端に少なくなり、例えば、縄文時代後期から弥生時代前期頃までの主要なテフラであるS-10、11（湯船第一スコリア（Yu-1））、S-13（砂沢スコリア（Zu））、S-22（湯船第二スコリア（Yu-2））、平安時代の9世紀に多量のスコリアを噴出したとされているS-24～6～8、さらには江戸時代に噴出した宝永スコリア（F-He）などにはば限定される。武藏野台地上の黒ボク土層における分析事例では、その中の個々のテフラを識別できた例はほとんどなく、これは、黒ボク土層形成過程における擾乱や再堆積により複数のテフラ層が混交してしまうためであると考えられる。今回の遺構覆土においても、色調や発泡度の同様のスコリアが、特に濃集する層位も示さずに、広い層位にわたり拡散する状況が認められた。おそらく、これらのスコリアは、噴出年代の異なる複数のテフラに由来するものが混在している可能性があるが、As-Bと混在している

ことやスコリアの特徴から、平安時代の S-24-6～8 に由来するスコリアが主体を占めていると考えられる。

両遺跡の全試料から検出された火山ガラスについては、これまでの武藏野台地の黒ボク土層における分析例により、無色透明のバブル型は立川ローム層中部に含まれている始良 Tn 火山灰（AT：町田・新井, 1976）に由来すると考えられる。

（2）神明後遺跡第28地点堀跡1の構築時期について

覆土における As-B の軽石および S-24-6～8 を主体とするスコリアは、覆土上部の 3～5 層に比較的多い傾向が認められたが、濃集というほどの産状ではなかった。また、As-B の軽石と S-24-6～8 のスコリアは、全試料において混在し、かつ両テフラの噴出年代の差異を反映した各テフラの層位的な産状も不明瞭であった。したがって、覆土中に認められた As-B の軽石と S-24-6～8 のスコリアは、堀跡の埋積過程において降下堆積したものではない可能性が高い。堀跡の埋積は、その覆土の特徴から、降雨時の流水や乾燥時の崩落と重力などにより、堀跡周囲の堆積物が堀跡内に流れ込むことによって進行したことが推定される。この場合、堀跡底直上の 9 層からも極めて微量ではあるが As-B の軽石が検出されたことから、堀跡の埋積開始時期には周囲の土層中に As-B が含まれていたとみられ、すなわち埋積の開始時期は As-B の降灰以後、古くとも As-B の降灰した 12 世紀初頭より以降である可能性がある。

なお、神明後遺跡より西北西へ約 1.3km 離れた福岡川谷頃付近の大井台上に位置する江川南遺跡および亀久保堀跡遺跡でも、今回とはほぼ同規模の薬研状の断面を呈する堀跡が検出されている。特に、亀久保堀跡は、その延長が神明後遺跡に向かっているとされている。当社では、両遺跡における堀跡について、今回と同様のテフラ分析を行い、As-B の軽石と S-24-6～8 のスコリアを検出している。ただし、これらの遺跡の堀跡覆土では、As-B の軽石が上部に多く、下部への拡散が認められないこと、S-24-6～8 のスコリアが As-B の下位の覆土から産出することなどから、堀跡の埋積過程において、テフラの降灰があったと考えた。すなわち、堀の構築時期については S-24-6～8 のスコリアが降灰した 9 世紀より以前の可能性があるとした。上述したように今回の神明後遺跡第28地点の堀跡 1 の埋積開始時期は 12 世紀初頭以降と推定されることから、現時点では、亀久保堀跡と神明後遺跡第28地点の堀跡 1 とは構築時期の異なる遺構の可能性がある。

（3）駒林遺跡第1地点大溝1の構築時期について

覆土における As-B の軽石および S-24-6～8 を主体とするスコリアの産状は、覆土上部に比較的多い傾向を示したが濃集は認められず、これらはほぼ全試料において混在し、かつ両テフラの噴出年代の差異を反映した各テフラの層位的な産状が不明瞭であるなど、前述した神明後遺跡第28地点堀跡 1 とはほぼ同様の産状を示した。したがって、駒林遺跡第1地点大溝1 覆土中の軽石およびスコリアも溝跡周囲の堆積物中より流れ込んだものと考えられる。

大溝 1 では 15 層より As-B の軽石が検出されたことから、埋積初期段階において As-B の軽石は既に周囲の土層中に含まれていた可能性が高い。したがって、大溝 1 における埋積時期は As-B の降灰した 12 世紀初頭以降とみられ、上位の 10 層と同層位とされた茶毬跡出土炭化材の放射性炭素年代とも矛盾しない。15 層より下位の覆土（20 層および 21 層）については、多量の褐色土粒が含まれることや分析結果においてローム層中に含まれる AT の火山ガラスがやや多い傾向が認められたことなどから、大溝 1 下部側壁を構成するロームに由来する碎屑物を多く含んでいると考えられる。したがって、この層位の覆土で As-B が検出されなかったことは、覆土の由来が As-B を含まない下層の土壤であることを示唆するものの、20 層および 21 層の堆積時期が必ずしも As-B 降灰以前であることを示すものではないと考える。現時点では、大溝 1 の構築時期を決定するまでの資料は得られていないが、埋積の初期段階がすでに 12 世紀初頭以降であったことは、今後の本遺構の構築時期検討における有意な資料と言える。

引用文献

- 新井房夫, 1979, 関東地方北西部の縄文時代以降の指標テフラ層. 考古学ジャーナル, 157, 41–52.
- 古澤 明, 1995, 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌, 101, 123–133.
- 貝塚爽平・小池一之・遠藤邦彦・山崎晴雄・鈴木毅彦編, 2000, 日本の地形4 関東・伊豆小笠原. 東京大学出版会, 349p.
- 久保純子, 1988, 相模野台地・武藏野台地を刻む谷の地形—風成テフラを供給された名残川の谷地形—. 地理学評論, 61, 25–48.
- 町田 洋・新井房夫, 1976, 広域に分布する火山灰—始良 Tn 火山灰の発見とその意義—, 科学, 46, 339–347.
- 上杉 陽, 1990, 富士火山東方地域のテフラ標準柱状図—その1 : S-25~Y-114—. 関東の四紀, 16, 3–28.
- パリノ・サーヴェイ株式会社2007「江川南遺跡・第20地点および駒林遺跡第1地点から出土した炭化材の年代測定」
『埼玉県ふじみ野市 市内遺跡群 2』

報告書抄録

香 高 編 編 発 所 所 種 特 川 か か か か 鶴 か か 松 か か 江 か か 東 か か 駒 か	名 者 者 機 委 日 在 地 地 主 時代 記事項 川崎 川崎 集落跡 中期 中期 中期 中期 集落跡 中期 中期 集落跡 後半 8世紀 中ノ馬 集落跡 中世 中世 東久保 東久保 東久保 ふじみ野 ふじみ野 駒林 駒林	市内遺跡群3 高崎直成 ふじみ野市教育委員会 2008年(平成20年)3月30日 所在地 市町村コード 北緯 調査開始 調査面積 TEL 049(261)2811 地 遺跡コード 東経 調査終了 m ² 種別／主な時代・主な遺構・主な遺物 特記事項 川崎1-6-10の一部 25-003 112453 35°53'07" 20060411 124 個人住宅建設 並森健一 集落跡／平安住居跡1軒、溝検出・土師器窯、須恵器壺(9世紀) 古代集落の南端で9世紀後半の住居跡を検出。東側で壇南側(右側)は棚状施設と思われる。 龜久保2-13-4の一部 30-030 112453 35°51'51" 20061004 88 個人住宅建設 高崎直成 集落跡／绳文中期住居跡1軒、集石2基、土坑1、ビット6検出・绳文土器(阿玉台Ⅱ)、绳文時代石器 中期前半、阿玉台Ⅱ式期古相の住居跡を検出。阿玉台1b式期からⅡ式期と推測する本集落時期の範囲に入る。 鶴ヶ舞1丁目64番6 30-046 112453 35°51'55" 20060605 20 個人住宅建設 高崎直成 集落跡／旧石器窯群1基検出 築地1丁目1-5 25-010 112453 35°52'27" 20070202 500 宅地造成7区画 高崎直成 集落跡／中・近世溝3、土坑7検出・中世(瓦質鉢、常滑鉢、かわらけ、砥石、板碑、錢貨) 中世末から近世初頭の遺跡の箇溝と思われる溝を並行して2本検出。近世初頭の新田開発との関連が注目される。 中ノ馬1丁目2-5 25-010 112453 35°52'30" 20070207 330 宅地造成9区画 高崎直成 集落跡／旧石器窯群5基検出・旧石器ナイフ、剥片 窯群は遺跡の東端、川から50mの近距離にあり、径1~2.5mの比較的小規模なもの。 東久保1丁目121番1 30-007 112453 35°51'49" 20070124 610 分譲住宅9棟 越村篤 集落跡／旧石器窯群6基、绳文時代中期住居跡1軒、土坑2、ビット30、近世以降溝4検出・旧石器(石核、ノッカ)、绳文土器(新道、阿玉台Ⅱ)、绳文時代石器 川から20mの近距離に径1~2.5mの比較的小規模な窯群、5~10mの範囲に2,3基の窯群がまとまって分布する。1977年に第1地点として調査した勝坂1式期の住居跡のはかに新道式窯の住居跡を新たに1軒検出した。 ふじみ野2丁目18-6の一部 30-009 112453 35°51'48" 20061012 112 共同住宅建設 越村篤 集落跡／中世~近世溝1検出 土地境の溝を検出。 駒林土地区画整理事業内地内20 街4,8,9 112453 35°51'57" 20060713 146 共同住宅建設 並森健一・高崎直成 集落跡／中世溝路2、道路、茶見跡2基検出 時期不明の溝を検出。テフラ分析の結果、12世紀初頭以降であった可能性あり。溝路の覆土中に茶見跡が構築され検出した炭化材の年代測定の結果中世(AD1316-1606)の結果を得た。溝路は西側で北方向へ直角に曲がり、第2地点の溝に統く。一辺150m前後の台形の方形館跡の想定も可能。
--	--	--

駒林 遺跡第2地点	駒林 土地区画整理事業地内17街 区7,8の一部	112453 25 - 013	35°52' 00" 139°31' 32"	20061121 20061129	80	個人住宅建設 越村篤
	集落跡／中世溝跡検出 南北方向の溝を23m検出。幅3.5m以上の底幅の広い薬研堀で一辺150m前後の台形の方形館跡の想定も可能。					
駒林 遺跡第3地点	駒林 土地区画整理事業地内21街 区3,4両地	112453 25 - 013	35°52' 02" 139°31' 36"	20061130 20061218	333	店舗建設 高崎直成
	集落跡／近世溝2、土坑3、井戸1検出・近世陶器 用途不明の大形土坑を検出。					
西ノ原遺跡第135地点	うれし野1丁目236-1	112453 30-001	35°51' 20" 139°31' 12"	20060314 20060619	1,160	集合住宅・店舗建設 高崎直成・越村篤
	集落跡／縄文時代中期住居跡1軒、炉穴1検出・縄文土器（加曾利E I）、縄文時代石器 加曾利E I 新式の住居跡を検出。西ノ原遺跡の加曾利E I 新期の集落は、南側へ偏重する傾向を見せており、183号住居跡は当該期集落の南西端に位置する。					
神明後遺跡第28地点	苗間神明後 306-1	112453 30-041	35°51' 42" 139°31' 43"	20060508 20061005	1,200	宅地造成 高崎直成・越村篤
	集落跡／縄文時代炉穴3、中期住居跡1軒、窯石23、屋外炉1、屋外埋設土器3、土坑6、落し穴1、ビット9、平安時代住居跡1、中近世溝3、堀跡1検出・縄文土器（勝坂、加曾利E）、縄文時代石器、土器部壊、甕、須恵器（8世紀後半～9世紀）					
神明後遺跡第29地点	苗間神明後 303-21,24	112453 30-041	35°51' 40" 139°31' 42"	20060508 20060519	52	個人住宅建設 越村篤
	集落跡／縄文時代ビット1、古代～中世溝検出・縄文土器（中期後半） 南北方向の溝は底幅の広い薬研堀で、18、26地点検出の溝と連なる。					
神明後遺跡第30地点	苗間神明後 303-1	112453 30-041	35°51' 42" 139°31' 42"	20061214 20061219	60	個人住宅建設 越村篤
	集落跡／縄文時代ビット5、近世柱穴検出・縄文土器（中期後半）					
静禅寺道路第26地点	苗間神明後 354-23,24	112453 30-022	35°51' 37" 139°31' 51"	20060417 20060615	226	個人住宅建設 高崎直成・越村篤
	集落跡／縄文時代早期炉穴10、前期～後期土坑8、ビット21、近世溝1検出・縄文土器（早期、後期） 早期の炉穴を10基検出した。2～7m間隔で点在し、足場を共有するような遺構同士の重なりはない。					
大井宿遺跡第13地点	大井1-3-32	112453 30-010	35°51' 09" 139°30' 59"	20060821 20060824	60	個人住宅建設 高崎直成
	集落跡／近世土坑8、ビット63検出・近世（陶磁器、結婚、錢貨、分銅） 川越街道大井宿の一角を調査。「天下一」の刻印がある掉秤の分銅を検出。					
本村遺跡第117地点	大井2-11-4,6の一部	112453 30-034	35°51' 04" 139°31' 19"	20060322 20060414	1,582	店舗建設 越村篤
	集落跡／中世～近世溝2、土坑4、ビット17検出 久田神社跡地で、社地を取り囲む溝を検出。					
本村遺跡第118地点	市沢2丁目12番13	112453 30-034	35°51' 15" 139°31' 28"	20060524 20060525	80	個人住宅建設 高崎直成
	集落跡／時期不明落穴1検出					
東台道路第46地点	大井字 東台626-11	112453 30-024	35°51' 02" 139°31' 33"	20060904 20060928	80	宅地造成 鍋島直久・越村篤
	集落跡／縄文時代中期住居跡2軒、土坑2、集石1検出・縄文土器（勝坂、加曾利E）、縄文時代石器 加曾利E II 期の住居で覆土中に集石土坑を検出。					
東台道路第48地点	大井字 東台649-21	112453 30-024	35°51' 01" 139°31' 30"	20070116 20070126	25	個人住宅建設 高崎直成
	集落跡／縄文時代中期住居跡3軒検出・縄文土器（加曾利E II） 集落内の住居密集区域で、3軒の住居跡検出。					



西遺跡第1地点試掘調査



西遺跡第1地点本調査



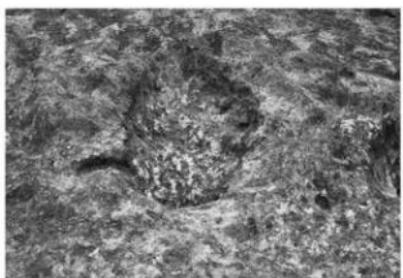
北野遺跡第1地点試掘調査



北野遺跡第2地点試掘調査



川崎遺跡第21地点H51号住居跡



川崎遺跡第21地点 H51号住居竈跡



川崎遺跡第21地点溝



ハケ遺跡C区7次調査トレンチ1



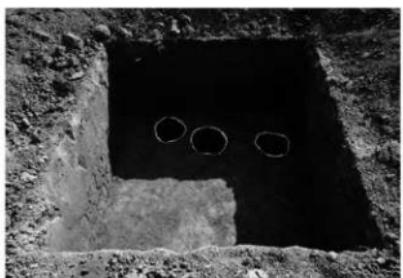
ハケ遺跡C区7次調査トレンチ3



滝遺跡第12地点試掘調査



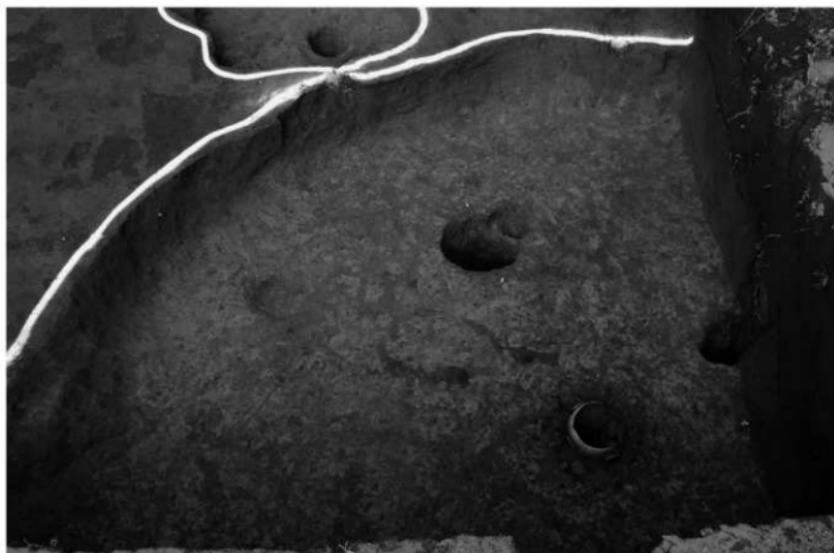
長宮遺跡第25地点試掘調査



長宮遺跡第25地点ピット1～3



長宮遺跡第26地点試掘調査



亀居遺跡第61地点16号住居跡



亀居遺跡第61地点16号住居跡炉



亀居遺跡第61地点16号住居跡炉出土状況



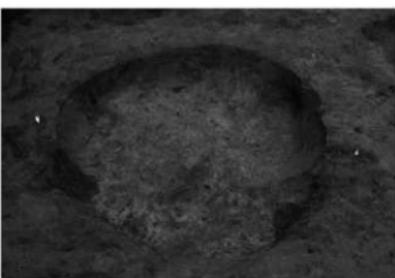
亀居遺跡第61地点16号住居跡遺物出土状況



亀居遺跡第61地点集石 1



亀居遺跡第61地点集石 2



亀居遺跡第61地点土坑 1



亀居遺跡第61地点試掘調査



亀居遺跡第61地点本調査



鶴ヶ舞遺跡第10地点砾群



鶴ヶ舞遺跡第10地点溝



鶴ヶ舞遺跡第11地点試掘調査



鶴ヶ舞遺跡第11地点トレンチ



松山遺跡第25地点H20号住居跡



松山遺跡第25地点H21号住居跡



松山遺跡第37地点試掘調査



松山遺跡第38地点試掘調査



松山遺跡第39地点試掘調査



松山遺跡第40地点試掘調査



松山遺跡第41地点試掘調査



松山遺跡第42地点試掘調査



江川南遺跡第21地点試掘調査



江川南遺跡第22地点試掘調査



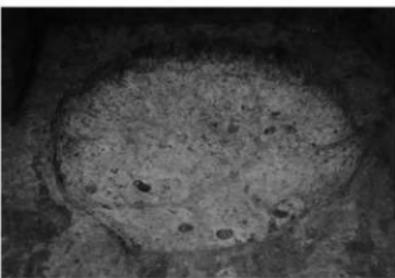
江川南遺跡第23地点試掘調査



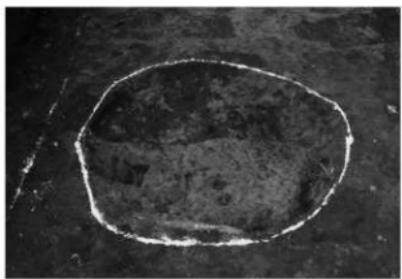
江川東遺跡第11地点試掘調査トレンチ3、4



江川東遺跡第11地点試掘調査トレンチ3、4



江川東遺跡第11地点土坑1



江川東遺跡第11地点土坑2



江川東遺跡第12地点試掘調査



江川東第13地点試掘調査



東久保遺跡第64地点試掘調査



東久保西遺跡第17地点試掘調査



東久保西遺跡第18地点試掘調査



東中学校西遺跡第28地点試掘調査



東中学校西遺跡第29地点試掘調査（西側）



東中学校西遺跡第29地点土坑 1、2



東中学校西遺跡第30地点試掘調査



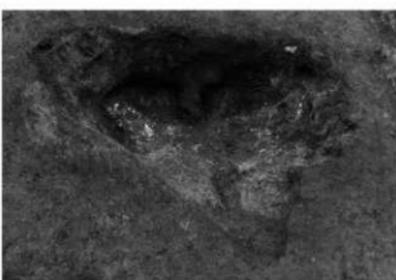
駒林遺跡第1地点溝1



駒林遺跡第1地点溝1土層・茶毬跡2



駒林遺跡第1地点茶毬跡1



駒林遺跡第1地点茶毬跡2



駒林遺跡第1地点溝1内硬化面



駒林遺跡第1地点溝1内出土馬頭



駒林遺跡第2地点試掘調査全景



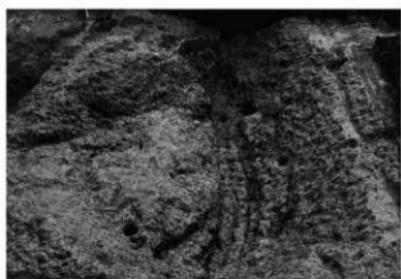
駒林遺跡第2地点溝1



溝2



溝3



駒林遺跡第3地点土坑1



駒林遺跡第3地点土坑1



駒林遺跡第3地点土坑2



駒林遺跡第3地点土坑3



駒林遺跡第3地点井戸1



駒林遺跡第3地点溝1



駒林遺跡第3地点溝2



駒林遺跡第3地点試掘調査



西ノ原遺跡第136地点試掘調査



西ノ原遺跡第137地点試掘調査



西ノ原遺跡第138地点試掘調査



西ノ原遺跡第139地点試掘調査



神明後遺跡第28地点試掘調査



神明後遺跡第29地点試掘調査全景



神明後遺跡第29地点溝 1



神明後遺跡第30地点トレンチ 4



淨禪寺遺跡第26地点本調査全景西側



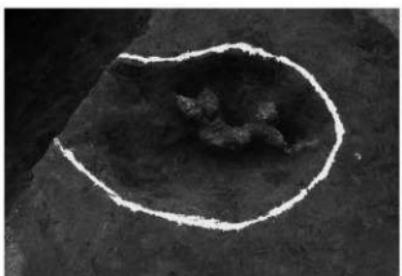
淨禪寺跡遺跡第26地点本調査全景東側



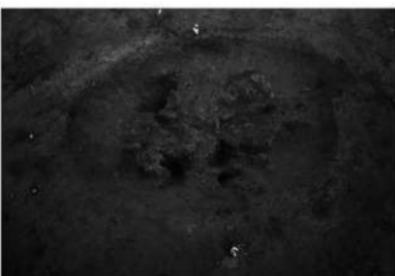
净禅寺跡遺跡第26地点炉穴 1



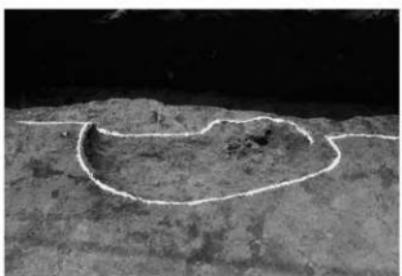
净禅寺跡遺跡第26地点炉穴 2



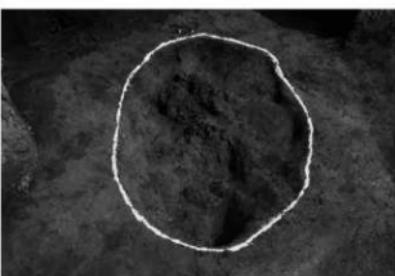
净禅寺跡遺跡第26地点炉穴 3



净禅寺跡遺跡第26地点炉穴 4



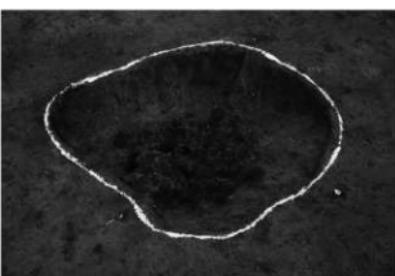
净禅寺跡遺跡第26地点炉穴 5



净禅寺跡遺跡第26地点炉穴 6



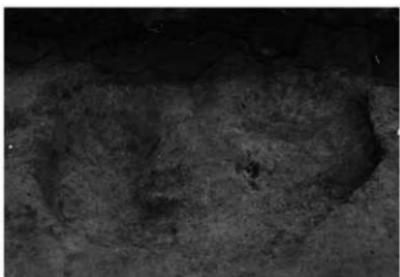
净禅寺跡遺跡第26地点炉穴 7



净禅寺跡遺跡第26地点炉穴 8



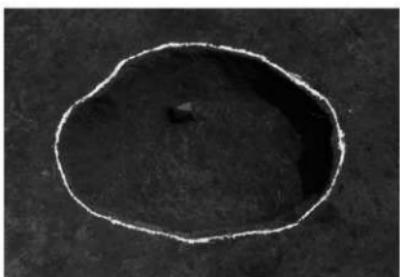
净禅寺跡遺跡第26地点炉穴 9



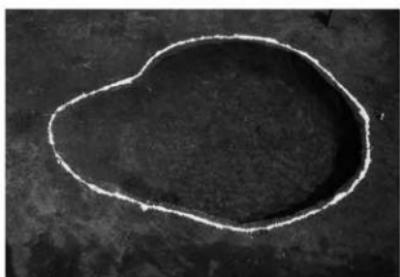
净禅寺跡遺跡第26地点炉穴 10



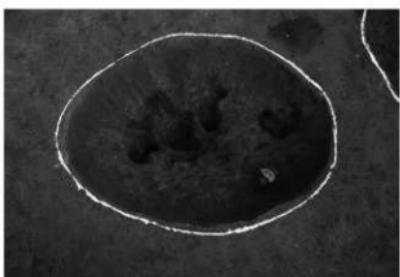
净禅寺跡遺跡第26地点土坑 1



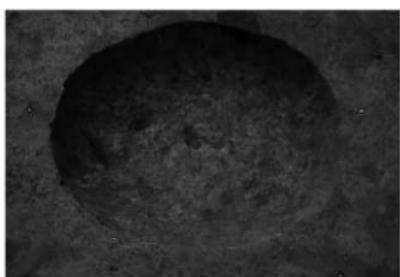
净禅寺跡遺跡第26地点土坑 2



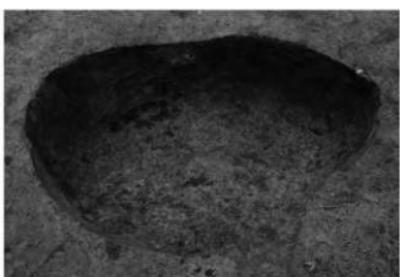
净禅寺跡遺跡第26地点土坑 3



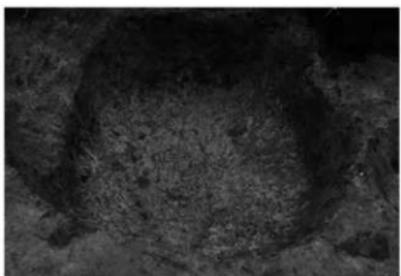
净禅寺跡遺跡第26地点土坑 4



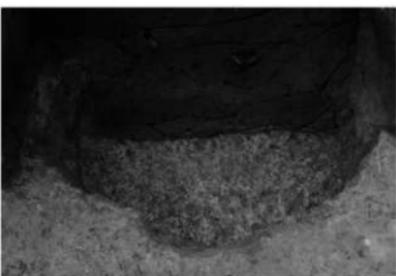
净禅寺跡遺跡第26地点土坑 5



净禅寺跡遺跡第26地点土坑 6



淨禪寺跡遺跡第26地点土坑 7



淨禪寺跡遺跡第26地点土坑 8



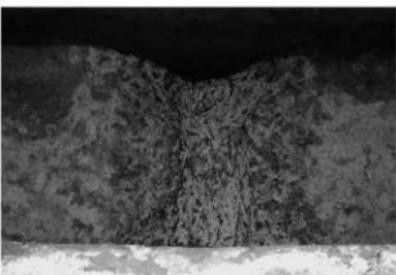
淨禪寺跡遺跡第26地点講 1



淨禪寺跡遺跡第26地点溝 1



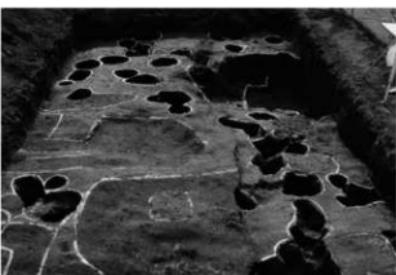
淨禪寺跡遺跡第28地点試掘調査トレンチ



淨禪寺跡遺跡第28地点溝 1



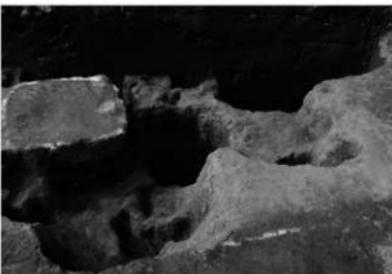
大井宿遺跡第12地点試掘調査



大井宿遺跡第13地点本調査



大井宿遺跡第13地点本調査土坑 2～4



大井宿遺跡第13地点本調査土坑 5～8



大井宿遺跡第14地点試掘調査



大井氏館跡遺跡第21地点試掘調査



本村遺跡第117地点試掘調査全景



本村遺跡第117地点北側



本村遺跡第117地点南側



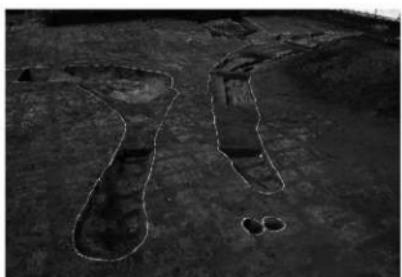
本村遺跡第117地点溝1トレンチ1～3



本村遺跡第117地点溝1 トレンチ4～5



本村遺跡第117地点溝1 トレンチ6



本村遺跡第117地点トレンチ6～9、15



本村遺跡第117地点溝1 トレンチ10



本村遺跡第117地点溝1 トレンチ13



本村遺跡第117地点柵列



本村遺跡第117地点溝1 柵列



本村遺跡第118地点落し穴



大井戸上遺跡第5地点試掘調査



東台遺跡第45地点試掘調査



東台遺跡第45地点遺跡見学会



東台遺跡第46地点試掘調査造構確認作業



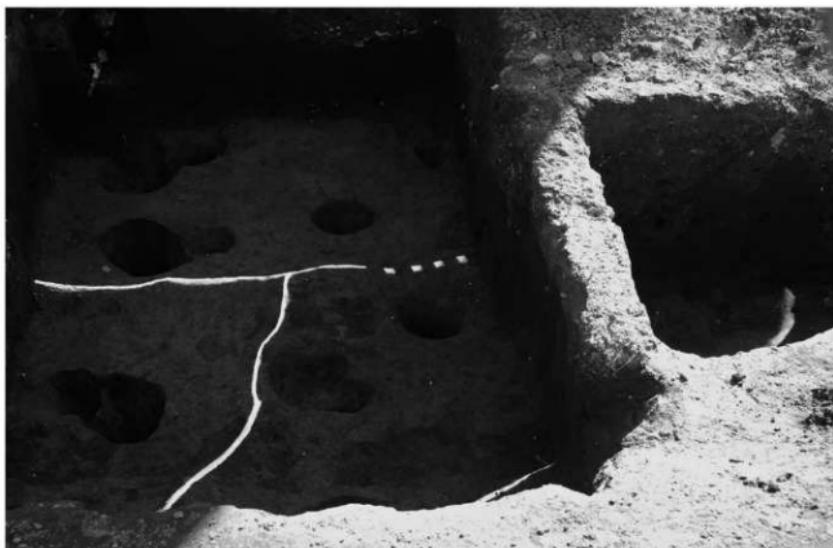
東台遺跡第47地点試掘調査



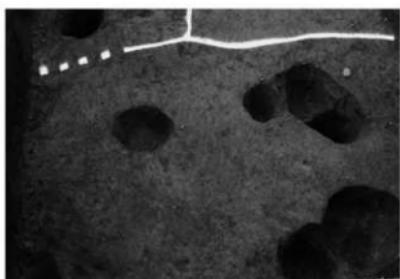
東台遺跡第48地点99号住居跡



東台遺跡第48地点100号住居跡



東台遺跡第48地点99、100、170号住居跡



東台遺跡第48地点170号住居跡



東台遺跡第48地点作業風景



遺物洗浄



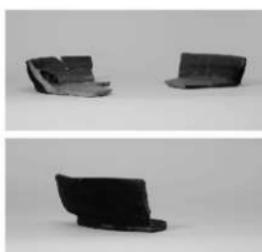
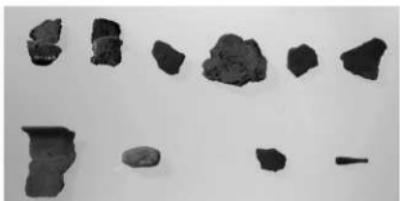
注記作業



川崎遺跡第21地点H27号居住跡 No. 7



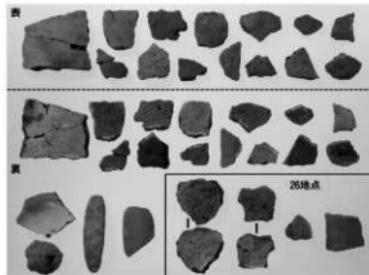
川崎遺跡第21地点H27号居住跡 No. 8 遺構外 No. 12



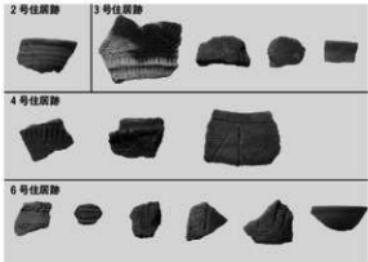
長宮遺跡
第25地点
No. 22
長宮遺跡
第25地点
No. 22 裏

長宮遺跡第25地点 No. 17

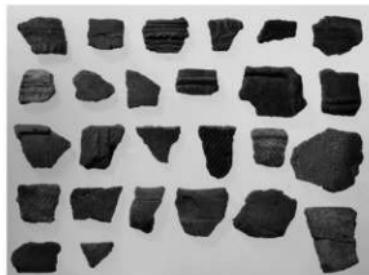
長宮遺跡 第25・26地点



長宮遺跡 第25・26地点 出土遺物



ハケ遺跡 C区7次調査2・3・4号住居出土土器



ハケ遺跡 C区7次調査5号住居出土土器



ハケ遺跡 C区7次調査6号住居・遺構外出土遺物



亀居遺跡第61地点16号住居跡 出土土器 No. 1



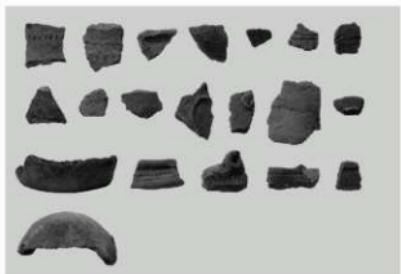
亀居遺跡第61地点16号住居跡 出土土器 No. 1



亀居遺跡第61地点16号住居跡 出土土器 No. 2・3



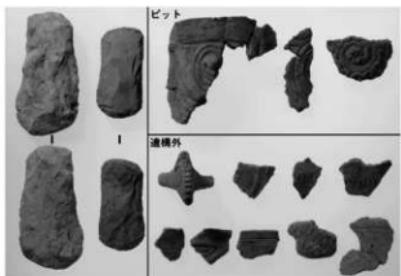
亀居遺跡第61地点16号住居跡 出土土器 No. 4~18



亀居遺跡第61地点16号住居跡 出土土器 No. 19~37



亀居遺跡第61地点16号住居跡 出土土器 No. 38~59



亀居遺跡第61地点16号住居跡 No. 60, 61・ビット1~3・波模外1~9



松山遺跡第39地点 出土土器 1~6



江川東遺跡第11地点出土石器



江川東遺跡第11地点
出土石器裏



駒林遺跡第3 地点 出土遺物

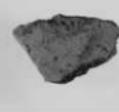
東中学校西道跡第29地点



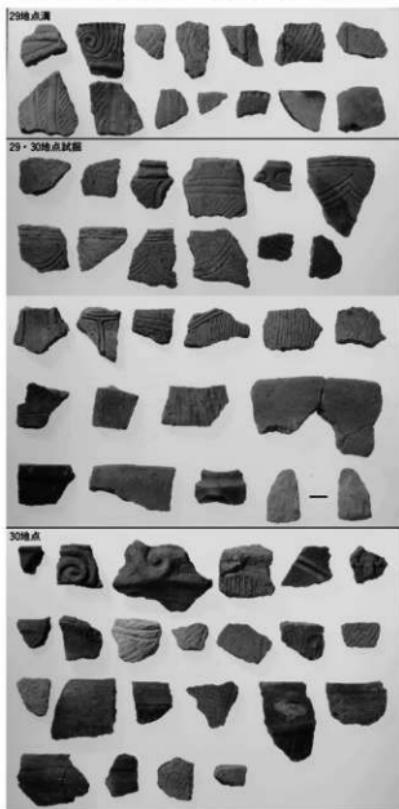
西ノ原136地点



西ノ原137地点



東中西遺跡第29地点・西ノ原遺跡136・137地点出土遺物



神明後遺跡第29・30地点 出土遺物



淨禪寺遺跡第26地点 出土遺物



本村遺跡 第117地点出土遺物



大井宿遺跡第13地点
出土遺物 土坑2 No. 1

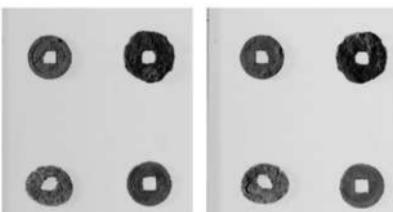
大井宿遺跡第13地点
出土遺物 P50No. 11



大井宿遺跡第13地点出土遺物 土坑2 No. 2

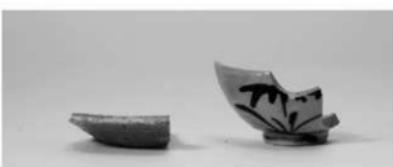


大井宿遺跡 第13・14地点出土遺物



大井宿遺跡
第13地点錢貨

大井宿遺跡
第13地点錢貨 裏



大井宿遺跡 第14地点出土遺物



大井宿13 P 50 分銅

大井宿13 P 50 分銅



東台遺跡 第48地点 出土土器



東台遺跡 第48地点 出土土器 NO. 1~16



松山遺跡第40地点全景



松山遺跡第40地点H33号住居